

# 証の物語

七月號





# 鍛錬の夏

夏と共に、海に由に、鍛錬の道場は開かれました。  
海水浴用品、登山用具、三越の良い品を選んで、興亞の夏に身心を鍛えませう。

大阪高麗橋 **三越**



月曜定休

公債・社債・株式・金融  
藤本有價證券投資組合幹旋

## 藤本ビルブローカー証券株式會社

大阪市東區北濱五丁目卅番地

支店  
東京・横濱・静岡・福島・小樽・名古屋  
金澤・京都・神戸・岡山・広島・松山  
門司・福岡・臺北・京城・新京・奉天



妊娠としての大切な責任はカルシウムを補給して諸病を防ぎ、子宮の収縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

片瀬醫學博士  
「安産のために」冊子呈上



榎林醫學博士 推獎  
片瀬醫學博士 監査

# フダカルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店

川柳雑誌 198

第十七卷 第七號

★内外時事★

- ★任内大臣(六月一日)
正二位勳二等侯爵 木戸 幸一
★大阪の切符制砂糖及燐寸
(五日)
★佛、對獨降伏(十七日)
★天津租界の隔絶解除
(二十日)
★近衛樞府議長辭任、後任
原嘉道氏(二十四日)
★伊佛休戰(二十五日)

大時計の下で (雑感)

大きな住時計の振子が夢のやうに動いてゐる。同じ間隔を置いて右へ左へ。

私は彼に教へられねばならない多くを持つ。幾十年を蹴躰いたり、馬車馬的に駛つたりして来た僕だけに。

ロンドンへ落下傘部隊が下りるといふ記事が出はじめたころ、流石のバーナード・ショウも沈黙したと新聞紙が報じてゐたが、……したのかさせられたのか想像に難くない。

誰でも云ひたいことは云ひたいのだ。沈黙を畏れよ。

近ごろの日本人は従来の日本魂にプラスすべきものを感じ出した。

▼音曲十年の稽古を積んでも初心の城を脱せず、二十年練磨したとて中々玄人になれるものではない。これに比して柳界の現状は如何。眞の先輩は妙し。

といふ記事を「昭和川柳」で讀んだ。玄人とアマチユアとの差がハッキリすれば川柳はもつと向上するだらう。今の川柳界がふるはないのは、アマチユアがアマチユアの立場を知らないからだ。イヤ、アマチユア

★佛レイノ内閣總辭職、ベタン元帥軍部内閣成立(十六日)

★佛、對獨降伏(十七日)

★天津租界の隔絶解除(二十日)

★近衛樞府議長辭任、後任原嘉道氏(二十四日)

★伊佛休戰(二十五日)

ユアが玄人の顔をしてゐるからだ。釋瀟瀟なら詳しくは考ふべしと云ふところだ。

▼川柳生活二十年三十年もの先輩を不相變、編輯や經營の第一線に立たしめるのは柳界の恥だ。川柳の社會進出など大きな口を利くよりも先づ先輩を第一流の社會人たらしめよ。

と同じ筆者が書いてゐるが、過渡期ではないか。その場合の川柳生活の

それ等の先輩の多くに權威のな

いのが當然だ。その人の眞の生活は外にあるのである。その証據に、仕事が忙しかつたのでスツカリ川柳を忘れてゐたやうなことや、仕事が忙しかつたので、雑誌の發行がおくれて濟まなかつたといふやうな編輯後記をそれ等の同人雑誌ではザラに讀まされるではないか。その場合の川柳生活の

不朽洞句抄

嚴 島(八包)

麻生路郎

清盛へ何か云ひたい島へつき

國寶へ壽永の秋の夢さなり

杓子一本友情の句さなれり

神鹿の群れが撮影手聞ざらせ

干潮の鳥居は棄てた氣味があり

落人の杓子を送る人もなし

岩物の名は藝者から聞いてゐる

左様なら左様なら宮島へ灯が這入り

の川柳界では、アマチユアのすさ川柳を畫家といふ文字と取替へて見れば、どんな點が違つてゐるか説明の必要がなからう。

世界が今重かく今
ニュースは、混信、故障、雑音のない、優れた性能の受信器で!
ピワターラデオ
6R-75型 ¥207.
この他各種設置

★最高權威の月刊柳誌

川柳雑誌 七月號目次

表紙(大阪・中之島風景) 福富 雷童
内外時事 麻生路郎(一)
大時計の下で(雑感) 麻生路郎(二)
隨筆 巷の話題 小山文三(三)
月川柳一ト筋 路郎・丹路・鮎美・豆 評 秋・某人・紫香・亞純(四)
笹の露の雫 安川久留美(五)
比喩の問題(川柳仁義) 高鷲 亞純(六)
御臨終 小畑自由朗(七)
武玉川四篇研究 梅本 塵山 姪子 省二 須崎 豆秋(八)
活字異變 立木 茂(九)
ユイモアを探る 啄木の新婚の家 カルピス(句) 戸田 孤篷(一〇)
柳二千六百年史 酒井 斗風(一一)
座席の三人 岡田 某人(一二)
貝 釘 吉田 水車(一三)
葬式の曲 孤 蓬 記(一四)
川柳 但馬路へ 宮島 的半日 某人・柳石 久米雄・市多樓 歸還して 宮岡 白峯(一五)
近作柳 嚴 島(一六)
川柳 塔 麻生路郎選(一七)
同舟近詠 諸 家(一八)
不朽洞句抄 麻生路郎(一九)
一家相 橋本 綠雨選(二〇)
集神 柳 清水 白柳子選(二一)
各地柳壇(二二)
柳界展 協 記(二三)
川柳 協 記(二四)
後 社關係の人々(二五)
★兵士は戦線に!我等は銃後に!

# コトワマアを採る

③

## 啄木の新婚の家

立木 茂

それはなんでも秋の中頃、もう東北盛岡は別に村陵とも云ふ程森や木の多い街ですが秋早く木の葉ははらりと散る頃でした、商用で岩手きつての寫眞王とも謂ひ度い田口忠吉翁をお訪ねしていろんなお話をうけたまはつてゐる中にふと盛岡近くの濫民村が生んだ明治歌壇の鬼才石川啄木の話が出ました、田口翁は盛岡の中学校の露台の欄干に最一度我を倚らしめ

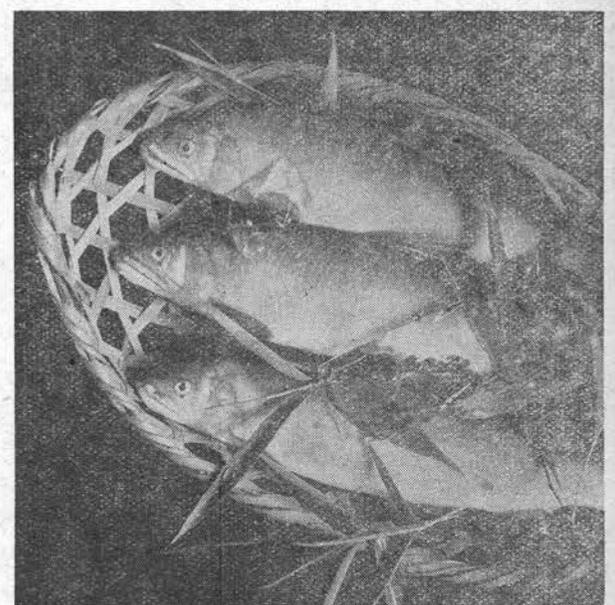
と啄木に思ひ出を吐き出さしめた盛岡中學での同級生啄木歌碑建立に大努力をされた方で中學時代から啄木の作品を好んだ私は時の経つのも忘れていろ／＼と伺つたのです、田口翁が「いや、その河鹿なく中津川畔に啄木としては生涯で一番心豊かな時代——まろやかな新婚の夢を結んだ時——の磯町の家が今でもそのまゝに残つてゐるから御案内致しませう」と夕暮近いのにお店先きの自轉車から自轉車ランプを採つて案内されました。岩手山はあのすつきりとした姿で夕闇の中空に立ち、中津川は今も昔をそのまゝに靜かに流れてゐました。

木々にかこまれて中津川畔に昔——啄木の住んだ時——そのまゝだと云ふ家——それはほんとうに茅葺の家で戸障子一枚すらその當時のまゝだそうです、然し電燈だけは煌煌と障子を明るく照してゐました。

田口翁はそちちと自轉車ランプで照して説明されました。相當古い荒れた家で先年啄木の親友の金田一京助氏がこゝを訪ねられた時に「昔のまゝだ」と云はれたとの事でした。啄木が住んだ家——私もいろ／＼と考へさせられました。田口翁に現在はどう云ふ人が住んでをりますか？ とおたづねすると

「いやそれが面白いんです、縣廳のお役人で他縣から轉任して来た人の夫人が啄木ファンでこの家に入つてから代々さうした方が借りられてゐるので家主はホク／＼ものです。啄木のゐた頃には家賃が澤山滞つて啄木はさん／＼罵倒されたらしいのですが今では寧ろ啄木様々と云ふ有様でしてね……」と。

それから私をわざと夕方案内されたのも日中見るより夕闇とランプの明までカモフラして美しく見せやうと云ふ翁の心づかいで



ふとさる空は廣さへ水の管 (歩八) ラメカ 福井 哲

## 貝 卸

岡田 某人

要は仕事師の世界なんだよ君

ふくろふの肝臓をしぼつてとつた油で灯をともしたら、一體どんな色の灯がつかと思ふかね、君。

所謂大衆と、高級觀衆との中間、つまり通俗インテリに向く娯樂といふものを誰かが考へないものか。小林一三なんて、ロツバをどんな氣で使つてゐるのか。

樹木は語らず  
語らざれどもなすところをなす  
人は多く語れども  
その語るところをなす

彼でも素通りさせながら、それらの力なり影響なりを風洞の内に、鐵瓶の水垢のやうに溜めてゆくことだ。所が世の多くの「苦勞して来た」といふ人びと、殊に女連中と来ては、風洞の片方を密閉してしまつて、中へ入つて来た苦勞をうんとこさ溜める(それも生のまゝに溜めておく)ばかりで、どうかすると元の方から逆もどりしてしまつたりする。だから、一旦味つて吐きもどした管の苦勞が二度目に入つて来ても、又新しい苦しみを味ひなはず。何時まで経つても同じことだし、腹の中に溜めてゐる苦勞を何度も何度も反芻するばかりである。

盛り場の十一時。酒の匂ひ。その癖みんなみじめ相だ。

兎も角も、精巧な機械をみてゐる時位幸福なことはない。たとへば寫眞機、タイプライターなど。これは僕だけの趣味だからか。

酒か女か、そのどちらかに當てのない人間が酒場に行つた位手持ち無沙汰なことはない。

借り着。これ位人間を情なく見せるものはない。しかもそうしなくては工合の悪い時があるといふことは、人間、ことに女が、どちらでもどちら間違つてゐるからだ。

支那料理。だが結局これだけのものか。味氣ないものではない。つひに一皿の鮎さしみに及ばざるか。

齒の抜けたやうな、といふ言葉があるが、これは主として齒うか。

省二さん！  
六月號の川柳雜誌にお懐しき隨筆を讀みました、宮武外骨老人は東京神田福田屋の飴ソ坊氏主宰の東京日々川柳會に偶然隣り合せて僅か一度だけ會ふた之れも頗る好印象を與へた好々爺、初對面の私に對ひ「君、ルーデサツクの句がないか？」といふから當時二十過ぎの私は一寸顔まげ、夫れでも「現代の嫁はサツクを知つてゐる」といふ僕の句を披露したら老人早速手帖にとめてゐた。其後歸國して翁と書簡の交換、亦雜誌「赤」や「スゴブル」等も送つて貰つた。私が金澤市に「百萬石」の創刊號を出したのは確

## 笹の露の雫

昔の竹馬さん

安川 久留美

歩くといふ建前のハイキングが汽車や電車の客引きになる。そのインテリキ性が處世といふもんだらう。

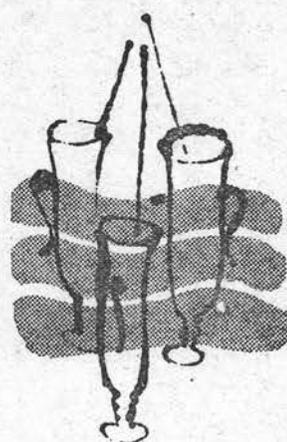
萬人必讀の書——國定教科書。

苦勞して来たといふことが必ずしもその人を立派にならせるものではない。苦勞をなめて立派になるといふことは、たとへば風洞のやうなもので、苦勞、苦痛、悲哀、寂寥その他何でも

あつた事が思ひ當りました。  
あの位云ひ度い事を相當歌つた啄木には男性よりも女性ファンが豫想外に多い事を思はされました。  
つい先頃大鏡百貨店に佛生寺盧明氏描く啄木の歌意——畫費——の作品展の時も色紙や半折を求めて行く客は二十五、六から三十二、三位の奥様風の人の多いのを見てなる程と思つた事です。  
筆者——富士寫真フィルム株式会社大阪營業所長。歌人。

# カピルス

(其の二)



カルピスを椀でよばれるアツパツパ  
カルピスを吸へば藤椅子少し鳴り  
カルピスをだまつて吸うた男の子  
カルピスで相談をする女連れ  
ドヤ／＼と来てカルピスをいふハイカー  
思ひ出は甘しネオンとカルピスと  
病床日記カルピスを飲んだこと  
カルピスを一人で飲んだ窓の星  
カルピスの饅も出て来た大掃除  
カルピスへ主客裸のまま笑ひ

紫香 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同  
白柳子 同 風 路 同 同 同 同 同 同 同  
葉 郎

編輯の夜に

Sata Special Klinik  
呼吸器病科  
診療 毎半年 加藤謙一 佐多愛彦  
螺長四郎  
内科  
院醫多佐  
大坂堂島北町 電話二八四八

か三十年前ではなく二十三年程以前です。一時新聞記者生活を退いた私が再び川柳雑誌の復活に同志をあつめたのが即ち私の二十七才だつたと思ふ、元「六華」や「礎」の標題に川柳誌を續刊したから今度は何とつけるか、集まつた北都川柳社の人々は光林坊、銀波樓、うみ三、紋二郎(故人)紅法師(故人)と久流美の四五人で、席上「復活」とか「後の礎」とかいろいろ話もあつたが結局最も大衆的に判り易い名「百萬石」と多數決したものです、銀波樓氏など大に賛成の名だつた、私は三四號まで主宰として發行したが仕事の關係上編輯を光林坊君に譲りました、私の句集「かき松翠」を同君が出してくれたのもこの年でした、「百萬石」は六十何號まで續いた、金澤に於ける最も川柳の旺盛期だつたのです、その發行熱に最も犠牲をはらつた小林紅法師逝き、ついで露月坊、紋二郎等の同人も夭折し、現在當時の舊同人として金澤に残る者は、樋口うみ三、永山光林坊そして久流美の三人位です、然しそのうみ三も光林坊も川柳に遠ざかり、私のみが漸く「川柳雑誌」と新愛知姉妹紙「北國日報」に近作を發表してゐる位で吳の舊阿蒙?の感じもします。

五月の空晴れた大阪の晝下り  
電車的女掌子に押搦つてゐた  
ホロ酔ひの作業服の男ふたり。  
「オ、お釣りが有るカ、」  
「ハイ、少々なら御座います、」  
「ジャ、これで御釣りを呉ンな」と百圓札を突つつけて女掌子を困らせて居た。  
車がさる車庫前に着いた時、車掌監督さんの裁きで小銭で電庫賃を支拂つて、降りて行つた頃には少し酔がさめてゐたらしい。  
筆者は此時茅原華山氏の詠する處の  
百圓の札を出して切符買ひ小札は無しと職工はいふの歌を思ひ出して苦笑を禁じ得なかつた。

## 隨 卷 の 話 題

### 小山文三

今この世は何彼につけて過去の實績が尊重される御時世である、こんな處にも世に言ふ過去の實績がモノを言ふ時代とは知らなかつた。

### 活字異變

須崎 豆秋

ある柳誌に「氷」と云ふ題詠吟で、百句に近い水の句がならび活字不足の折柄その中の十句位は水の字で代用されてゐた。これなどは題詠吟として讀み流してゐたら別に障りも無いが、一句獨立した場合氷が水になつてゐたのでは、さつぱりわやな話である。先月某新聞に「皇軍の蔣兵」といふけしからん誤植があつた、校正子タコを釣られたことであらう。

包 詰 (一〇・五)  
二〇〇・百圓  
粉末・生粉有

# 中耳炎に

多くの中耳炎は、その初期に於てすなわち適切な治療を缺き、慢性にありては殆ど手術的解決を用ふるが常である。然るに近時メルクソニアミド劑、特に二個のアルパジルが耳科的方面に應用範圍の擴大されるに及んで、中耳炎の療法は劃期的な進歩を見るに至つた。即ち、難症にありても其の内服により膿汁の停止、解熱、疼痛の緩解等を経過の煩悩に成功せしめ、中耳炎に關係ある療法を樹立することまつた。

# メルジパル

株式會社 山之内藥業株式會社



# 川柳塔

路郎選

福知山 小畑自由朗

おそろしさ豚兒愚妻をオイミ呼ぶ  
ヒットラー位ひやる氣へ婢ミ子が

賢妻

三日目に吾洒落解す針仕事

横丁の婚禮

行列の紋つきしようのうナフタリン

孤篷さん二千六百年史を編む

外史曰くわしの若心はシヤボン玉

一浪氏

ハワイからヂヤパン人情教へられ

大阪 橋本緑雨

風呂敷の重み米でないか言はれ

故郷から

大阪の寄附まで頼む忠魂碑

土地熱に須磨も舞子も賣地あり

物價高みんなぎうしてゐるのだらう

外米に赤ン坊もちみやせました

横濱 福田山雨樓

小説家自分の牢で食はずるる

兒ミ角力うつかりするミ双葉負け

坐禪でも組まうか慾が多すぎる

書道に七年仲々上達せず(二句)

晩學ののびないこをやつミ知り

一丁の墨が短かくなつただけ

張家口 岩崎柳路

高砂やこの裏船の移民村  
其の席の酌婦の指に黒ダイヤ

其の後の蔣介石へ

報告は勝妻まじき夢であり

大阪 寺井鏡々

一步一步計算の出来る靴の値だ  
恩給がつく頃マンネリズムミなり  
金を貸す方の脊廣が擦り切れて  
バラソルを廻して娘憂なし

講演の濟んだ拍手で眼を覺まし  
パリマネットくしやくの頭子供描き

大阪 大西八歩

儲け給ひし頃ははかなきスフ時代  
土ミなり得ぬガラスの悲哀  
メロデイーは靴の先から意識する  
陽ざしに負けて開く朝の戸

布哇 高澤一浪

寝る時間さいもせつせき機嫌さる  
あれで目が醒めれば儲ものにされ  
法螺だけは吹くが遊びはけちな人  
手の届く花何んミなく物足らず  
長生をなさいミ世辭を皆に受け  
イニシャルまでも同じミ酌ぎこほし  
首つたけ素顔で出ればよいきけん  
壁一重ミなりも愛の巢ミにらむ  
午前二時役者は全部にて二人  
マダムから適材にされ肩がこる  
分譲地マダムも蛇も驚いた  
戀敵先だつものにこミ欠かず  
光榮の孤立コートの襟の垢  
愛ミ云ふものもひミつの阿片です  
電話口禁酒破れたらしい聲  
溜めるだけ溜めずに棺ミ云ふ無念  
妾腹を娶つて閨の圈の中  
かかミ女房ぎらいにする坐敷

水銀に計れぬ熱に惱まされ

金落ちてるたのに犬は目もくれず

午前二時前人未到境を踏む

せがまれて眼の届かないダイヤ買ふ

おい其所を退けミ金持大手ふる

女ですものミ阿呆の膝へくる

寝るための晩酌きけんよい女房

昔昔惚られ初もありました

家貧にあらすけちんほ生れつき

親友ミ同じ目的ミは皮肉

父の子ミ思つて居つて天下無事

石屋の子石屋ぎらいミ言ふ誇

双子です一人はアダム一人イブ

大阪 戸田孤篷

切符制その食慾が不安なり  
買溜をしたのか婆さん提けてるる  
素通も背伸びして見る嚴島  
事務長が旅のプランへ朱を入れる  
俄雨スフの持物なかつたか  
爬蟲類先祖の事もいひたい日  
オーエンの嘆をよそに凡夫ミも

大阪 中島生々庵

法燈に千年の夢ちらミゆれ

普天子に新茶を頂く

新茶よし友の情の身にしみて

路郎氏白髪染を斥ける

無精ではない不自然が嫌だささ

倅せは聞きてに母ミ云ふを持ち

歩け歩け歩き給へミ満員車

大阪 戸倉普天

流行なら柄が合おうが合ふまいが

片づけて鏡に衣紋つくつて見

勉強は次で寫真ミゴルフ狂

大掃除軸物計り拂ふ父

満洲戻り毛皮の外套だけ残り

デパートに砂糖中々残つてず



月給で酒一升も買へぬこは  
反感がいつしか顔に出てしまひ  
サービスをします徳用マツチする  
大阪 多田一波

下園 櫻川 不水

あな楽しなき新婦はのたまはず  
晋に聞く安達ヶ原の夕がらす  
かまきりにまさか虎徹も抜かれまい  
きすだらけ泳ぎ着いたが藁一つ  
やせ腕を振つても蒼い空は空  
きせるおさめておなら一發  
こすき廻せ山は動ぜず  
へそくり溜めて唯我獨尊  
鍼力引つかく派出なヒステリー

大阪 田中風葉

釜ヶ崎厚司姿を親しまれ  
統制は米屋の店を廣く見せ  
伊勢海老はタンクの様になり込み  
お土産に出した伊勢海老未だ動き  
外米を知らぬ芦屋に生を享け

中 原 鏡 人

利子で食ふ食へないなきこい、身分  
麥飯をほめて大阪人の旅  
通勤となる

吊皮へ吾も犂めく群にあり  
新婚さ見たか寫眞屋寄つて來る  
新婚同士出會ふ湯の宿  
密月より(二句)

廣島 濱田久米雄

國寶ミ區切る硝子のつめたかり  
記念撮影貰へるものさ鹿が寄り  
貰ひ風呂今日のお茶の値を話し  
トマト茄子寓居の庭が擴けられ  
薬瓶下駄の鼻緒がゆるいなり  
清貧の姿で小役人喰べる

大阪 好崎伸仙

気が揃ふ事が良いのか悪いのか

安德帝陵參拜  
幼帝を偲び馬關の晴れもせず  
大阪 魚住滿潮

壹貳等満員興亞奉公日  
愛國公債家賃は待つてもろておけ  
前科十犯でも勇敢な男かな  
大阪の二階で好きな男さる  
煽風機のむきを變へてる紙幣の束  
借衣裳男仲人に手をひかれ  
大阪 清水史路

行き詰まる一步手まへのお蔭さま  
横着ささうやら肺まで癒すらし  
がむしやらの言葉の中の暖か味  
お茶入れて青葉の京のこきに觸れ  
躍動を顔一面によく喰べる  
妹 盜 難

大阪 清水白柳子

下戸は下戸なりに酒なき十五日  
安らげき家根の下なり子が三人  
釘買ひに四十の男列に入り  
日曜のニュース短かし寝ころべば  
幹事ミは七曜表に氣を使ひ  
初夏の奥津温泉にて

大阪 西川愁水

あまりすき透つてゐてはすかしい風呂  
岩に腰かけてきてらがほしくなり  
セルフタイマー仲居の肩へ手をかけて  
笑はれて泣いて歸つた日もあつた  
相傘は雨の止んだを知らぬけに  
運命だ運命だからあきらめる  
大阪 中内翠芳

大阪 中内翠芳

慰問品買ひに子供も連れて行き  
聯合軍總退却に聲もなし  
人の靴蹴つて小膽者にされ  
大阪 多田市多樓

大阪 多田市多樓

闇相場番頭の智慧が半分入り  
親も子もモンペ姿で銃後の田  
追憶の果は夕陽の中へ出る  
すいた様にする氣人生五十年  
牢屋さは思へぬ春の月も入り  
牢番は見て來た不幸子へ聞かせ  
大阪 水谷鮎美

大阪 水谷鮎美

雨上り郵便局が近すぎる  
ドレス着て六月の風につてくる  
片戀の笛ふくひまがあるのなり  
屋根のおもさに耐ゆる魂  
メダカメダカ一年生にいちめられ  
十粒ほぎ豆さん植ゑてさうする氣  
名古屋 吉田水車

名古屋 吉田水車

空襲々々洋の東西言ふされず  
ハイキング荷物屋ほぎ提けて行き  
觀光バスそつほを向いて説明し  
靈柩車まだその先きを急ぐなり  
藤山一郎汪精衛に似て唄ひ  
大阪 須崎豆秋

大阪 須崎豆秋

リュックサクサク樂書をするものも入れ  
おこられるさ逃げ込むこがある小犬  
五月雨ビルの窓から首が出る  
ほこぎす銃後へ泣いてゐるのなり  
戦況のニュースへ貰ふ赤インキ  
外米の不平へ恐れ入り給へ  
陣中の日誌へ泣いてくれる母  
蚊帳越しの話しも物價高きかや  
大阪 正本水客

大阪 正本水客

寺荒れて住持の話面白し  
同情をするより外に能がなし  
喉巻いてるれば居るきて美しき  
團体へ五重の塔が見えてくる  
浮御堂見合さしれる歩調で來  
淋しきものにトタンの破れ

大阪 正本水客

寺荒れて住持の話面白し  
同情をするより外に能がなし  
喉巻いてるれば居るきて美しき  
團体へ五重の塔が見えてくる  
浮御堂見合さしれる歩調で來  
淋しきものにトタンの破れ

風呂敷を用意してゐるのも女襟きつく合して少女美しい下駄の音ひきする様にくる夜學乗るが早いか婦人雑誌をもう開き足張つて女はバスのゆれに立つ陽のあるうちに歸つて子遊ぶ

豊中 黒川 紫香

駒下駄で歩けば蜘蛛の巣にかゝり蜘蛛の巣をつけて鋸貸してくれひき逢うて蛙の目玉や、動き螢籠持たされにくる女の子夕立へ靴磨屋も逃けてくる家計簿へ密豆喰べたこは書かす油ギラ／＼港の水黒し

君ではないが矢つ張り怒られる雑魚さりに去年のカン／＼り出され交番へかくれに來てる鬼ごっこ小使をくれるに姉は隅へより口實は誰かを病氣にしてしまひ船頭ののろけ海には波もなし豆腐屋へ猫の嫁入り頼んごき素裸で二時を聞いてる蚤取粉晝逢へば妓見向きもしてくれず

大阪 丸尾 潮花

カルピスへ若い社長と奥様と形見ごも思ふ指輪を手放す日

大阪 丸尾 潮花

これやこの蝶細身の太刀に夢檜扇や哀史の主にもの間はむこゝに血の痕甲冑に夢深く

寶物

大阪 岩橋 双虎

大英字新聞の首相の名を知

うするやろと見てゐるさ、毎日一日分を携帶してオフィスへの行き還へりに讀みはじめた。日本郵船の NITTA MARU の處女航海を知つたのもそのためである。日本の總理大臣の米内さんの名が Mitsunasa であることを知つたのも、そのためである。もつと詳しく云へばアメリカの新聞で大阪の火事を讀んでそんな火事があつたのかと路郎に訊き質すほど、日常新聞を讀まな

知識に過ぎない。それが毎日、電車の中や寝る前の一小時に「日布時事」をのぞきはじめてのだから全く神風以上の奇蹟である。

島については案内人ハダシの案内ぶり。  
★三越の愛店川柳  
三越大阪支店ではサーピスの向上に資する爲愛店川柳を店内で募集した。流石に三四十名の川柳人を持つ同店の事佳句名吟が宣傳部長の机上に山積した。「行き届く言葉へ客は又來る氣」(廣々)これが支店長賞だ。「來る客のみな親しい顔に見え」(鐵砲)「店員としての賣場は小さくゆき」(靜山)以上二句が次長賞だ。碎けたサーピス奨励法として店員間でも評判がい。

新聞

らひの霞

乃女史へ

ホノルルの北海ク

ンから

The

Nippon

Jiiのーケ

サリと届いた。折角の好意をど

町横柳川



眼に青葉丘はさつきの馬車が行く晝食をよばれて歸る見舞客  
黒幕を上手に使ひ御榮轉家傳藥醫者を無用だこは云はず種痘した熱へふた親若いなり

歸郷

大阪 岡田 某人

遺愛の机の黒さを目にのこしうす曇り御下賜の鶴のやもめなる大本營跡敷ものうすじめり天守閣浮世と別な風が抜け案内の誰を見るこもなく喋り

泉邸

大本營跡

廣島城主閣

嚴島神社

寶物

旅の身のある日茶の湯へ膝を折りありがたし有縁の猪口のまん丸くペンキ畫に似て嚴島暮れかゝるありつたけ喋り旅情に身をゆだね驛頭の零時握手の手が痛し

歸路

松岡氏へ

尼崎 酒井 斗風

月給へ眞面目な人が不平云ふ雑草の花にすわつて雲を見る釣る人の足をくゞつた水すまし法城の一夜に嘘はなかりけり大講堂さつきの花の中をゆき

失戀に女醫になりたいたいなご思ひ病院で夫婦三分るやうに待ちお辭儀にはあらず足尖痒うなり世話好きの定評のある世話になり

花嫁もシャンパンヘチト口をつけ新郎の餘裕新婦を盗み見る

某結婚披露宴

大阪 北川 春巢

船の旅 大陸は招く 満・支・蒙への OSK ライン 船商阪大 一呈進書内案一



# 柳川 二千六百年史 (七)

戸田 孤篷

## 大正時代

### ○第一次歐洲大戰

日清戦争が支那分裂の野心を抱かしめ、日露戦争がロシアの實力を疑はしめて第一次歐洲大亂の原因の一つを醸成した。地中海ひつくりかへすUボート

○日獨戦争(二五七四)  
日英同盟を正直に守つた日本が大戦に参加して青島を攻略す。得る所は南洋群島と黄金の津波と、個人主義、悪自由主義精神的歐禍。

捕虜さんに習つてパン屋店を開け  
椰子の影艦長さんのおげさ節

### ○ヴェルサイユ條約

國土に一步も敵兵を入れなかつた獨乙がまた。國家の總力の問題がクローズアップされる。そして残つたもので作つた條約の不合理は二十五年後の今日その禍根をむしかへす。礎つたものだけの平和が出来

上り

口達者そろひ民族自決主義空椅子を一つ聯盟出来上り

### ○東宮御外遊(二五八一)

日本はしまつて以來の御事。一路御安泰を祈る聲が巷に滿つ。皇體砲潮路は壹萬五斤料

バツキンガム金の御馬車と金の皇子  
ボンベイの土に玉歩の跡白し

### ○ワシントン會議

ヴェルサイユ平和會議から世界はしばらく剣に背を向けた。第一回の軍縮會議。人類の平和とあらば五五三木の砲にかへて三笠は保存され

「機密室」またたくひまに初版  
關東大震災(二五八三)

### ○關東大震災(二五八三)

二十世紀の悲劇世界大戦を成金製造に終始した日本にも天は公平にこの大厄をふらす。物質の帝都は復興したが識者をうれへしめる精神歐化はその極に至らんとする。

梅干の味を覺えた避難小會  
太短かく生きるとジャズが

## 昭和時代

### ○ロンドン會議(二五八七)

主力艦の比率を補助艦に押しよめ様とする。五と五の英米が三以上に伸び様とする日本をおさる。血の製圖出来て「夕張」出来上り

補助艦へ赤横槍が飛んで出る  
軍縮の名で軍擴が行はれ

### ○滿洲事變(二五九一)

日本精神まさに地に墜ちるかに見えた時突如喝を入れる様に起つたのがこの事件。灯を一つ消すひまもなき北大營

鉤鼻を集めてリットン報告書  
上海事變(二五九二)

### ○上海事變(二五九二)

滿洲の戦火が上海に飛んで列國環視の中に大和魂を見せてや

白脚群蘭北の間にねはれる  
富士山と櫻の花と三勇士

### ○聯盟脱退(二五九三)

醒めてみればはかなくも追ひし平和であつた。日本は今日の日より堂々自主的な歩みをはじめる。

云ふだけは云ふてジユネーブ引上げる

腹きめて出れば脱退二分間  
決裂をした全權へ湧く歡呼

### ○滿洲帝政(二五九四)

二年前獨立を宣した友邦滿洲國は執政溥儀氏を皇帝に推戴して磐石の重きをなす。

### ○ワシントン條約廢棄

五五三は期限が切れたらそれでおしまひ。今日からは五五五の大日本軍令部いつもの懸へ陽があたる

### ○防共協定(二五九六)

持たざる國日獨が手を握つて赤禍に對抗し進んで世界の新秩序建設に乗り出す二五九六には伊太利が之に加はる。

### ○支那事變(二五九七)

コミンテルンの魔手は西にスペイン東に支那。重なる抗日毎日には遂に蘆溝橋畔に爆發す。蘆溝橋興亞の門のひらくとこの地の果へ戦車は夢を割つて行く

### ○第二次歐洲大戰

整備兵歸らぬ翼まだ信じ占領だどの屋上も日章旗日の丸になり切つてある日本兵

### ○第二次歐洲大戰

ヴェルサイユの偽平和は遂に馬脚をあらはした。獨總統ヒットラーは鮮にその所信を實行してゆく。對時六ヶ月の後獨逸は

獨特の電撃作戦の火蓋を切る。

電光の様中立國は消え  
ヒットラー世界の空氣もあそび

### ○紀元二千六百年

不介入興亞へ一步二步三步  
明治維新この方はじめて一億日本人が日本のよさ有難さを内外の情勢の眞只中に認識してある

### ○支那中央政權樹立

すでに愛憎をつかした蔣介石には膺懲を續けつゝ日本と兄弟の交りをつなぐに足る新支那中央政權が汪兆銘氏一派によつて打掛ける。

### ○興亞(二五九七)

八紘一宇の大理想顯現の途についた日本は先ず興亞の第一目標に邁進する。朝陽は大陸へ匂ふ東風支那語などかじり興亞の隅に

### ○國家總動員(二五九七)

聖戰目的貫徹の爲前線はもとより銃後も國家總力戦に動員せられ一億一心光榮の責務を等しく享受してある。代用品明日の勝利を確信し

### ○興亞(二五九七)

一月以來緒を重ねること七回こゝに川柳二千六百年史は一應完結させて頂きませす。永々御愛讀と拙稿のためには貴重なる紙面を御許し下さつた「川柳雜誌」へ深謝して謹言致します 孤篷

### ○興亞(二五九七)

日本は先ず興亞の第一目標に邁進する。朝陽は大陸へ匂ふ東風支那語などかじり興亞の隅に

旗幕ルタメ  
幟徽  
章

大阪市南区  
本橋五丁目北  
加藤旗幟店

電話 四六二七番  
四六二七番  
四六二七番

カヌタありま

# 武玉川四編研究(八)

梅 本 塵 山  
森 子 東 魚 二  
蛭 省 二

(181) 慾にはなれて眠な家  
塵山||食客三千人を置いた、孟晋君のやうな家と想はれる。  
東魚||人の出入りが、絶えないのであらう客の多いのを喜ぶ様になるものだ。

(182) 舟路のちから目にあたる物  
塵山||舟路の「ちから」が不可解である。  
東魚||水や空、何一つみえぬ海上では甚だ心細いが、帆が見えるとか、鳥が飛ぶのが見えたとかでさへ、何となく力強く思はれる。鳥影でも見えれば、なほの事である。

(183) 七種も近くて開けは錢の音  
塵山||火箸などで齊を叩く時は、錢のやうな音がするとであらう。  
東魚||遠くで開けば、何處も同じ様に聞えるが、近く開けば、夫々に富豪は富豪らしい音を立てると云ふのかと思ふ。

(184) 岩ひは二葉からはや年か密  
省二||岩檜は岩に生じ四季緑色。乾けば巻き、潤へば展く。(二葉と年寄は掛けてある)塵山||年が寄りとは、適切な見立てではない。

東魚||ちぢれたやうな葉の有様を、さう云つたのであらう。

(185) 髭を命と都へは出す  
省二||髭を大切に居るので、都などには行かぬ。旅をせぬ。閑寂を楽しむ。  
塵山||何故に髭を命とする歟。その理由が全く不明である。或は宗祇の故事か。  
東魚||隠者を氣取つて居る人物。

(186) 角入て浦の苦屋と也にけり  
塵山||男子が元服して、頭に角を入れた故少年の容貌が失せて、定家の「見渡せば花も紅葉もなかり、浦の苦屋の秋の夕暮」といふ歌の如く、甚だ淋しく見ゆるといふ意。  
東魚||お説の如くであらう。

(187) 九重てみすく入らぬ糸を買  
塵山||京都には、みす屋針といふ名物が有つたけれども、糸は無かつたと思ふ。何の糸か不明である。  
東魚||雲上人は、自ら縫ふ事はいたされなから、糸は不用であらうが、七夕祭の時はみすく不用ながら、願の糸にする糸を買はれる事であらう。

(188) 新し椀に顔を慰む  
省二||新しい椀に顔を寫して、ほくえむ。塵山||幼児などの所作であつて、大人では無からうと思ふ。

東魚||新妻ではないか。  
省二||うんより、一層延びてしまつて居る氣のぬるさ。(饅餡は田舎人の嗜好物とされて居る)。  
塵山||敏捷の江戸つ子には。饅餡よりも蕎麥が好かれた。うんと云ふ名からして、薄のろらしい氣がする。  
東魚||田舎で、うどんを喰ふ場合であらう(眞間の紅葉見物の場合など)。

(190) 汐汲とも順に道草  
省二||順に汐を汲むので、道草も亦順になる。  
塵山||謡曲の「松風」も、姉妹二人が道草を食つてゐるやうなものである。  
東魚||順に道草に穿ち味がある。列をなして往來する汐汲のさまが想像される。

(191) 衣を脱と人にかたるな  
塵山||閨中の私語と思はれる。  
東魚||原稿が「脱て」とあつたので、前説が出た次第と思ふが、原本は「と」である。坊主が醫者に化けて遊里通ひをするので、秘すべしといふ心持ち。「われ落ちにきと人にかたるな」の句調を、踏んだものと思ふ

(192) 顔と貌堅ひ咄に黄昏る  
塵山||顔は男、貌は女といふ意を表現する爲に、文字を二様に書いたものらしい。男女が顔と顔を突合せて、何か眞面目の長話をするうちに、日が暮れるのである。  
東魚||柔い咄なら夜がふさはしい。堅い咄に日の暮かゝる處に、佻びさが漂ふ。

(193) のれんさへしはふ時には音かする  
省二||前二解に賛。此句の場合堅いといふ説明文字も必要なのであらう。

(194) 呵られてから思ひつく夢  
省二||大に叱られた後。初めて夢をみてゐた事に思ひつく。  
塵山||是までの事が夢のやうだといふのか昨夜の夢見が能く當つたと言ふの歟。それが不明瞭である。  
東魚||成程不明瞭である。

(195) 初雪は降そこないも酒に成  
省二||降りこないも亦一興。「初」の字に十分満足が買へる。「どつさり」と降ると初雪下卑るなり。『初雪やワキは酒屋へ申付け。』塵山||酒客の爲には、能い口實であらう。  
東魚||初雪讚美も都であればこそ。酒家は何にかにつけのみたがる。

塵山||纏腰簾などは、必ず音がするが、世間を憚る密會には、その音が一層耳に聞ゆるのである。  
東魚||音をたてるとは常に氣もつかぬ、暖簾口の布さへ忍ぶ夜は、ぼさと音をする程に思ひなされる。  
省二||然り。息を殺しても、それさへ響く心地がするものだ。

大阪 名物 松前屋  
本舗 心齋橋筋  
出張店 朝日ビル 専門大店  
電話南(四)四六番 電話北(四)五〇番

(196) 懐へ文の喧嘩の手か這入  
省二口争ひの末が、懐の手紙へ手がはい  
る。

壺山 歌舞伎劇の幕明には、屢々見る所の  
場面である。

東魚 見せろ、見せぬとの争ひ、喧嘩と云  
つても親しい仲間同士らしく思はれる。

(197) 二度めは隠居しての開帳  
省二隠居してから二度目の開帳に遇ひ、  
初めの頃を偲ぶ。年長し。

壺山 三十年目又は五十年目に行はれる、  
神佛の開帳であらうが、措辭が整はぬやうだ

東魚 久し振りでの開帳に、一層有難味が  
あるわけ。

(198) 植木屋に植られて居る石燈籠  
省二植木屋さんが石燈籠を、適當の場所  
に据えて呉れる。

壺山 石燈籠を植ゑるのは可笑しい。  
東魚 石燈籠の廻りに植木を配置し植ゑる  
のではないか。石燈籠が黙々と、其中に在る  
光景かと思ふ。或は植木屋の庭に、色々の植  
木に交つて石燈籠があるのを、植られて居る  
と曲つて云つたのではないか。

(199) 賣られて行も旅立ちのうち  
省二これは悲慘な、人生への旅立ちだ。

壺山 此の旅、昔は駕籠に乗り、今は汽車  
自動車に乗る。

東魚 一 張羅を着せられてゆく事であらう  
一層旅立ちと云ふ處に、哀れさが深い。

(200) 松明のゆく山に鳥の音  
壺山 深山幽谷を跋渉する態である。鳥の  
音とは、宿鳥が火影に驚いて啼くのである。

東魚 宿鳥に違ひない。  
省二私は弱体にして山に入った事がない  
斯る経験は得べくもあらず。

(201) 白造り風よりはきつじもの  
壺山 風は木の葉を吹き落すのみだが、白  
造りは大木の幹を伐つて加工するのであるか  
ら、強い者に相違ない。

東魚 洒落氣分である。「きつじもの」は單  
に強いといふ意より、多少味が違ふのではな  
いか。素晴らしい、どえらいと云ふ意味合ひ  
を持つて居ると思ふ。

省二「きつじもの」で前二解の如き意を持  
たせるのであるから、常に古句をみてゐない  
と、とりつきにくい。

(202) 二日匂ひに飽る鼻紙  
壺山 此の「二日」は何であらう歟。  
東魚 懐紙に草の花でも摘みとつた場合に  
もあるか。

省二二日酔かと思つてゐた。  
(203) 一瘦やせて叶ふ大願  
省二色々断ち物をしての事だから一ト瘦  
やせた頃に大願は成就。(一疲やせて、など  
は言葉の妙。)

壺山 前説賛成。  
東魚 戀の願らしく思はれる。

(204) 堅り法華言懸りなり  
省二病氣が治つたなどといふ事から、堅  
まり法華になるもの、一度成つたら他人のい  
ふ事など、更に耳に入れぬ。「堅法華茶碗を割  
つて南無つきり」などの古句もある。

壺山 念佛無間譚天魔などと云つたのも、  
又言懸りのやうなものだ。  
東魚 句法がどうも、不十分なやうに思  
ふ。

(205) 鼻は崩れていなな笹原  
壺山 梅毒の爲に鼻が崩れたので、有馬の  
温泉へ入浴に行く。「猪名の笹原」は、「有馬  
山」の笹原風吹けば、いでそよ人を忘れや  
はする」といふ古歌に據つたのである。

東魚 いなの笹原、有馬の御厄介者だとい  
ふ洒落氣分。  
省二有馬温泉史話(小澤博士著)は、よく  
調査されてゐる。

(206) 頼政も射てから後は人頼  
壺山 紫雲殿に於て射落した鶴は、郎等の  
猪速太が留めを刺した。  
東魚 鶴退治以後は危険な事の第一線には  
立たないと云ふ意かと思ふ。(前説の如くだ  
と、外にも射たあとを人頼みにする對照的の  
ものがなければならぬと思はれる。例へば揚  
弓を射たあとの矢の始末は矢取女にまかせ  
ると云ふやうな場合。)

省二鶴以後にも、「古來稀なは頼政のむ  
ほんなり」で大にでかして居る。これは、早  
太を引張り出した句と解して居た。

(207) 還俗をして袖口を振ツて見る  
壺山 多年の習慣で、狭い袖が氣に懸る。  
東魚 不動堂の堂守をしてゐたといふ友人  
が、盃をもつ手の袖口を氣にする癖を出して  
大笑した實例を知つてゐる。

省二「還俗に馴れても袖の取廻し」(武9)  
(208) 料理人ははつきりは仕そこない  
壺山 意餘つて語足らぬ句で、何とも解釋  
の下しやうが無い。  
東魚 何か不出来があると、何時もは失敗  
はないやうに、イヤはだけは私の失策でした  
と、テレ隠しを云ふのではないか。

省二「是はつきり」の内容が、語られてゐ  
ないから、句として、更に面白くない。  
(209) うかんだ氣にて戻る谷汲  
省二「うかんだ氣」とは、ヤレ／＼安堵の  
意。(有難い境遇であるとの意をも含む)美濃  
の谷汲寺は西國三十三番札所の打止である。  
壺山 目的を遂行して、一安心の態である。  
東魚 谷汲の參詣から戻るので、「浮ぶ」は  
蛭子さんのお説の如く、後生安樂を願ひ得た  
或は、罪滅ぼしをなし得たと云ふ氣持。

武玉川四編研究正誤表(一九七號)  
(頁) (段) (行) (誤) (正)  
九八八八 二四二一 二五 などを  
一〇二 双六 凌 雙  
九八八八 二四二一 二五 などを  
一〇二 双六 凌 雙



# 松坂俱樂部

あらゆる趣味のお稽古場

手はぎきから興義まで  
氣軽く、楽しく、御上達

會員募集

- お稽古
- 長唄
  - 常盤
  - 清元
  - 小唄
  - 鳴物
  - 尺八
  - 舞踊
  - 謡曲
  - 能楽
  - 小鼓
  - 八曲
  - 曲
  - ヒア
  - 聲
  - 書
  - 日
  - 茶
  - 道
  - 道
  - 華
  - 洋
  - 科
  - 俳
  - 川
  - 道
  - 學
  - 松坂レコー
  - 吹込
  - 道
  - 所

川柳講座

川柳雜誌主幹

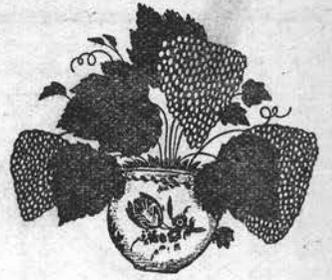
麻生路郎先生

擔當

御申渡 七階 松坂俱樂部 電話 三〇三三番

## 松坂屋

大坂 日本橋



# 川柳仁義(V) 比喩の問題

高鷲亞鈍

初蚊帳の中はシャツ着たキリギリス

霞乃

この句は當誌六月號の川柳塔に掲載され、今月の月評會で某人氏ご僕まで俄然、問題にした句である。五、六月頃、蚊帳を吊り初めた夜、キリギリスがシャツ着てゐるばかりに瘦せた殿方を、軽い驚ろきで見直したまいつた句意であらう。平常、凡てを知り盡してゐる夫婦生活の間に、そのお互ひの身體の瘦肥、短長なご氣にも咎める事のない毎夜を、初めて蚊帳を吊つた、夜その蚊帳の内らでみた印象に、ふこ詩境が湧いたものだ。

句主が霞乃女史であること、そのモデルが、瘦身の路郎師である事が歴然なものの丈に、句意にそれまでの想像を織り交ぜ、一見微笑しく、しかしほろりさせられるやうな情愛も汲みこれて名句の匂いがせぬでもない。

然し乍ら、句主の名を隠し、句を獨立して考へた場合、シャツ着たキリギリスが或ひは殿方であるか、男の子のことであるか、作者が又男であるか女であるかも判らず、それは讀者の想像の側にあるものではあらう。斯ういつたキリギリスを人間に例へた場合、二様の觀點が成立つ。

即ち、その一つはキリギリスを擬人法としてみた場合、今一つは瘦身の人を比喩した場合である。前者はキリギリスを人間に變へたことになり、後者は人間をキリギリスに變へたことになり、その兩方共、作句する上の表現上の修辭法故に吾々は許されるのである。表現技術の面白さは實に、こゝにあると言つてよく、その適切、明快なる場合



## 評月川柳一筋

路郎・丹路・鮎美・豆秋  
某人・紫香・亞鈍

### 奥様教育と家庭川柳

路郎 今月は少し趣きを變へてみやうぢやないか。提出句を出さずに「川柳塔から」近作柳樽から、或ひは「同舟近詠」から自由拾つて句を批評したら……  
丹路 それや面白いですね。  
（同意の聲あり）先生から何か話を引出して貰ひませうか——。

路郎 さうだね。（其時丹路の句間がお茶を配られるのを眺めながら）  
一つみんな奥さんに句を作らずやうにすると可いね。奥さん、どうですか。（笑聲）先日、廣島で下關の市多樓君と逢つたらネ。勤務から戻つたら机の上の句稿に朱で棒が引いてあつて、平凡と書いてゐた（哄聲）といふ話だつたが、どこの奥さんでも批評家の立場へ廻はるらしいんだね。  
奥さんが句を作らうとすると、主人はみんな頭から貶してかゝるんだ。それはいかんね。奥さんが句を作れば頭からやつつけずに、うまく指導してゆくやうにする可いんだ。奥さんの批評といふものもよく當つてゐるらしい。××君も××君も奥さ

んから……（笑聲）  
丹路 「キング」の谷脇素文の漫畫川柳は、よく通つてゐますね。  
路郎 先日、廣島でもある人がそれを攻撃してゐたが、一面一般の人に知らしめるといふ功績も認めなければ嘘だと云つておいた。誰でも初歩の時を振返つてみたまへ。現在のやうな川柳を作つてゐたかどうか。やつぱり最初は、あの口を開けた漫畫川柳を見て這入つて来たんぢやないかネ。はじめからレベルの高い川柳を作つた人は殆んどゐないと思ふ。始めはお月さんに兎がある繪を見てお互ひに面白がつてゐたが、今でもお月さんに兎があるとは思つてゐないのと同じだよ。

### 句意の判断と省略法

兩隣入學出来てABC（川柳塔）  
句主青兒  
路郎 餘談はさて置き右の句に就て少し話しあつてみたらどうですか？ 豆秋君！ どうです？  
豆秋 ABCが大變利いてゐるやうに思ひます。が入學する前までの兩隣の苦勞と一變してABCになつた變化が、よくこの句からうかがはれます。ABCが餘情を持つてゐて、まあ面白く思ひます。ABCを、あれ、やはりこの現はれてゐる通り假名でなしに、ABCの英字で良いと思ひます。  
路郎 この兩隣のABCが聴えて来て、入學した事が判つたが、眞中の家の子供だけが入學出来なかつたといふのか、眞中の主人公の家も入學出来て競争的にABCが聴えてくる惱ましさと共に嬉しく思つてゐるといふ句か、どちらかね。  
豆秋 しかし、眞中の子供が入學できてゐなかつたら深刻ですね。やりきれん。  
路郎 さう。やりきれんね。さあこの句からどちらを判断したら可いかね。  
丹路 これや、考へ物ぢや。（笑聲）  
某人 僕は單なる傍觀者としての微笑しい感じを出してゐると思ひますね。  
紫香 さうですね。  
某人 ではないと、自分とこに受驗した子供があつたとすると片一方のABCだけでも惱ましと思ふ。  
路郎 この句から、さう解釋するのが妥當であらう。しかし若し自分とこだけ落ちてゐるとしたら、どう表現したらいいかね。  
某人 さあ、六ヶしくなつて



で川柳的なユーモアを感得するものは低俗である。寧ろ、素直に「初蚊帳の中に殿方瘦せたまひ」をした方が、そのユーモアは解消したまひはいへ、生命ある句として數等價值あるか知れない。

尙この句の消略は動詞であつて、初蚊帳の中はシャツ着たキリギリスがゐる。さういふ終止語である。これを若し某人氏の洩した通り、初蚊帳の中に(初蚊帳の中にはでも同じ)としたら、月評會で僕が述べた通りの解釋が文法上成立する。但し初蚊帳の中は、初蚊帳を主語にすれば、必然性を持ち、初蚊帳の中に、さすれば、キリギリスが主語になつて、偶然性を持つ。そしてこの句の初蚊帳キリギリスに必然性を持たす可きか、偶然性を持たす可きかによつて句の評價が左右される事も考へられるが、僕は、この句は必然性を狙つたところに、川柳的な妙味を掬ふことが出来、偶然性の場合、俳句的な境地に陥入るやうに考へる。何れそれは技法上の問題として猶研究する余地があらう。以上月評會の席上では意の満たぬところもあり、假初めにも名句として鮎美氏の推稱に並居る諸先輩の同意に對し、一言補足して僕の態度を瞭かにしたい。讀者諸賢の大方の御批評を俟つ。



# 同舟近詠

宮武外骨老に呈す

金澤 安川久留美

市祭は自慢の獅子の並ぶだけ  
梅鉢の旗が隠れた非常時だ  
四恩説銃十郎の舊思想  
獅子頭錢五の像の前で泣け  
讃岐から外骨、信濃から一茶

菰草魚は僕が風呂を浴びた裸のまゝだね——なんて句を作つたら、どやしつけてやるよ(哄聲)

路郎——さきの亜鈍君の話でな

家内が僕を探り上げてないといふのだつたら僕は餘りとりあげない。そして、もし僕が本當に

キリギリスに似てるんだつたら或ひは僕も亜鈍君のやうに肚が立つかも知れない。此川柳を藉つて夫を侮辱したといふ事になる。しかし僕はそんなにキリギリスに似てゐると思つてゐないから肚が立たないんだ。

俳句で芭蕉が、吃の句を決して詠まなかつたといふのだが、それは、弟子にさういふ人があつたからださうだね。この點は僕も注意してゐるのだ。義足の人が僕の友人に出来てから僕は跛足の句は作らないし、席題にも課題にも出さないやうにしてゐる。

某人——この初蚊帳の中はのはこの句は生きてゐる。

豆秋——さうですね、これ、初蚊帳の中にならば、初蚊帳がキリスカゴかなんかになつてつまりませぬね。

某人——これも省略法ですね。初蚊帳の中にはの意。

亞鈍——違ふ。初蚊帳の中は、はい初蚊帳の中はだらう。はがにはなれば文法的には、キリギリスが主語になつて、初蚊帳が副詞になる。これは初蚊帳はで主語としたところに、シャツ着たキリギリスよりも重點があつて、この句を効果あらしめ

てゐるんだよ。某人——あ、そうか。間違つてゐた。

## 句の想像と特異性

### 特異性

待つほどににんげんとして現れぬ(川柳)

句主 鮎美

亞鈍——先生からさきに省略法に就て教はりました。鮎美さんのこの句ですね。これは省略以上いろいろ想像されるのだが、説明できたら一つして呉れませんか。

丹路——これは省略法の優なるものやね。

鮎美——これは自分としては別に斯うした場合があつたわけでもなんでも無いんで、まあ心の圓さを自作自演したかたちです。そしてそれを強調するため、下五に現れぬ。——と止めて置きました。これにはこの句を讀んで戴いた人の個性に俟つものです。

亞鈍——僕は今まで讀んだ川柳と違つた意味で、いろ／＼面白く思ひました。何故かといふとこの句は何を言つてゐるのか一寸解らないが、それだけに讀む側にあたつてゐる／＼と想像される自由を與へられて嬉しいんです。從來の多くの川柳は、一つ一つが直に解つてしまつて、それは世間あり勝ちなことが多くて、ちつとも興味がないそこにいろ／＼と具體的な表現をしてゐないので、額縁に嵌つ

てゐない油繪をみるやうな懐中の廣さを感じるんです。

秋豆——にんげんとして、いろ／＼想像されるところでせうね。私は湯上りの氣持をした風態であらはれたといふ風に——

路郎——この人間といふのは、所謂眞人間といふ意味と、單に人間の姿をしてゐるといふ風にも、讀んだ人によつて違ふ。亞鈍君の樂しめるといふのはそこにあると思ふが。

亞鈍——嬉しいとか、面白いとか僕が言つたのは、いろ／＼と想像される、その想像すること

が愉しく、面白いといふ意味です。

某人——待つほどに、といふのは待つほどにといふのね。面會に行つて、案に相違して湯上りのまゝぐる／＼巻の帯で、やあ——といつて出て来たといふ意味かな。

路郎——本當は人間の人間でなしに、出て来るまでは全く仕様のない人間で、なんだか假面を被つて人間として出て来たといふ事だらうかな。

某人——もう一つの解釋は、非人情な人間が時を経つて従つて人間として現れたといふ意味にもとれる。

丹路——僕は待つほどに醜惡な人間として出て来た、……。

某人——僕としては、やはり句に、ある場面を出して欲しいね。

丹路——さうやな。

路郎——その意味で、この句は

從來の川柳とは型破りの句だよ。

亞鈍——そんなコソ／＼した氣持でなしに大膽に言つてゐて可いと思ひますね。或ひはこれは川柳といふ概念からハミ出たものかも知れないが、この作句態度は、昨今の新しい詩人の態度であつて、現代詩に現はれてゐるコスモスやカオスの世界觀からみて、勿論幼稚なものかとは思ふけど、鮎美氏が、多年川柳一ト筋にやつて來られて、川柳文學から、入つていつて斯ういつた作句態度を持たれたといふ事は敬服して惜しまないものがあると思ひます。句が判らないといふことは、結局、藝術を深めてゆけば、ゆくほど素人や初歩のものには判らなくなつてくるのが、當り前であるとも言へます。判らうとするなら、結局さういつた作者の精進にまで、自分も努力してかゝつていつて始めて解るといふ事になりま

す。それは形式の上でも内容の上からでも言へることです。

路郎——僕が昔出してゐた「雪」時代の句には誰にでも判るといふ句ではなかつたと思ふ。誰にでも判る句が良いとばかりは言へないものもあるねえ。然し、判らない句で充滿してしまつといふやうな事はあるまい。ツアラストラは文學をやる人は一遍は通つても誰も理解されるとは言へないしね。

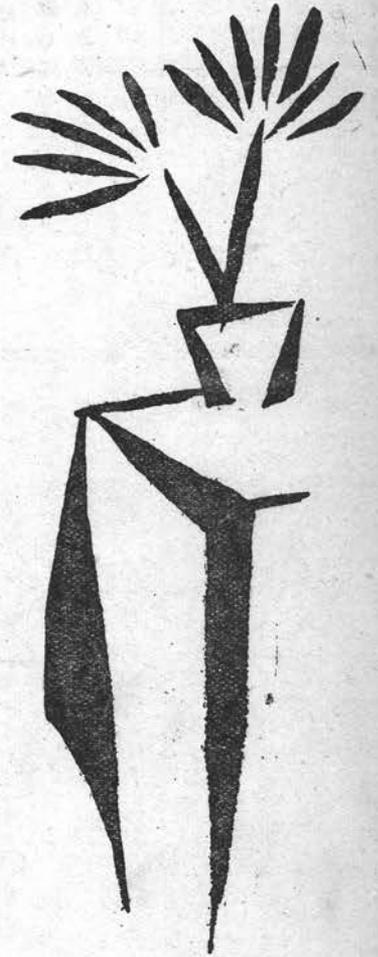
川柳の幸福さは何處にあるかと言ふと、お互ひが如何に想像





# 樽柳作近

## 選郎路生麻



二年生片假名の名に慊らず  
外へ出て遊べし枕裏がへし  
長男に父の短所を指摘され  
父さんは子よりも蘭が可愛いさ  
八つ手なら枯れずに育つ庭があり  
木炭バス山の裸は他所のこ  
集金人お叩頭になれた猫背なり  
洒落も云へ和尚は俺と伺い  
歸還兵聞きたい膝に取りまかれ  
自爆する無線へ本部目をつむり  
砂糖屋へ續く行列避難めき  
信心に團體で行くにぎやかさ  
煙の輪の重なり合つて浮いてゆく  
體験は子に聞かせたくない事ばかり  
盗みする勇氣もなくてうづくまり  
叱りつゝ生きる希望を子につなぎ  
親の愛知らぬじれつたさに殴り  
食つたこまないのがふぐを論じ立て  
親に似たものぐさ親に敵られる  
寺参りはつかしくない年になり  
先づ健康云へば貧乏世帯なり  
將棋盤戦地の友を思ひやり

加古川 兵庫縣

水田光哉

くぬぎ林幼き頃の香ひする  
焼き小屋に炭はあれども町遠し  
五月二十五日同じく壺坂寺、  
岡寺、檀原神宮、葛井寺に詣  
でて

同 同

名はよくもあり賣れない貞女  
有難し二萬五千の骨如來  
葛井寺出世地蔵にもまゐり  
怒るこだけをボン／＼知つてゐる  
氣をかへてもう一度だけ下から出  
お前もそう思ふか三機嫌なり  
安全地帯に誰も居ず陽は眞上  
揺り起せば今日は第三日曜日  
はかなくも石に刻みし特務の名  
眠られぬ暑さ螢の灯も淡し  
乗せられ易し腹立て易し我れ  
ひみ月の給料で服作れない  
犯人ご寫す刑事は得意そう  
平凡な夫を持つて睦しく  
召集で行く子があるにまたはらみ  
瘦薬なか／＼利かず十九貫  
明くる朝違ふ方角から戻り  
子のこゝでまた決心がちこにぶり  
丸髻は賣約濟云ふかたち  
新家庭派手に蝸蠅退治られ  
もう春が逝く、くたくたの紫雲英東  
雨が輪の遊びに耽ける池の中  
ピーヒル、ピーヒル、ピーヒルせつか  
ちな雲雀

同 同

名はよくもあり賣れない貞女  
有難し二萬五千の骨如來  
葛井寺出世地蔵にもまゐり  
怒るこだけをボン／＼知つてゐる  
氣をかへてもう一度だけ下から出  
お前もそう思ふか三機嫌なり  
安全地帯に誰も居ず陽は眞上  
揺り起せば今日は第三日曜日  
はかなくも石に刻みし特務の名  
眠られぬ暑さ螢の灯も淡し  
乗せられ易し腹立て易し我れ  
ひみ月の給料で服作れない  
犯人ご寫す刑事は得意そう  
平凡な夫を持つて睦しく  
召集で行く子があるにまたはらみ  
瘦薬なか／＼利かず十九貫  
明くる朝違ふ方角から戻り  
子のこゝでまた決心がちこにぶり  
丸髻は賣約濟云ふかたち  
新家庭派手に蝸蠅退治られ  
もう春が逝く、くたくたの紫雲英東  
雨が輪の遊びに耽ける池の中  
ピーヒル、ピーヒル、ピーヒルせつか  
ちな雲雀

同 同 鈴木可香

名はよくもあり賣れない貞女  
有難し二萬五千の骨如來  
葛井寺出世地蔵にもまゐり  
怒るこだけをボン／＼知つてゐる  
氣をかへてもう一度だけ下から出  
お前もそう思ふか三機嫌なり  
安全地帯に誰も居ず陽は眞上  
揺り起せば今日は第三日曜日  
はかなくも石に刻みし特務の名  
眠られぬ暑さ螢の灯も淡し  
乗せられ易し腹立て易し我れ  
ひみ月の給料で服作れない  
犯人ご寫す刑事は得意そう  
平凡な夫を持つて睦しく  
召集で行く子があるにまたはらみ  
瘦薬なか／＼利かず十九貫  
明くる朝違ふ方角から戻り  
子のこゝでまた決心がちこにぶり  
丸髻は賣約濟云ふかたち  
新家庭派手に蝸蠅退治られ  
もう春が逝く、くたくたの紫雲英東  
雨が輪の遊びに耽ける池の中  
ピーヒル、ピーヒル、ピーヒルせつか  
ちな雲雀

同 同

名はよくもあり賣れない貞女  
有難し二萬五千の骨如來  
葛井寺出世地蔵にもまゐり  
怒るこだけをボン／＼知つてゐる  
氣をかへてもう一度だけ下から出  
お前もそう思ふか三機嫌なり  
安全地帯に誰も居ず陽は眞上  
揺り起せば今日は第三日曜日  
はかなくも石に刻みし特務の名  
眠られぬ暑さ螢の灯も淡し  
乗せられ易し腹立て易し我れ  
ひみ月の給料で服作れない  
犯人ご寫す刑事は得意そう  
平凡な夫を持つて睦しく  
召集で行く子があるにまたはらみ  
瘦薬なか／＼利かず十九貫  
明くる朝違ふ方角から戻り  
子のこゝでまた決心がちこにぶり  
丸髻は賣約濟云ふかたち  
新家庭派手に蝸蠅退治られ  
もう春が逝く、くたくたの紫雲英東  
雨が輪の遊びに耽ける池の中  
ピーヒル、ピーヒル、ピーヒルせつか  
ちな雲雀

同 同

名はよくもあり賣れない貞女  
有難し二萬五千の骨如來  
葛井寺出世地蔵にもまゐり  
怒るこだけをボン／＼知つてゐる  
氣をかへてもう一度だけ下から出  
お前もそう思ふか三機嫌なり  
安全地帯に誰も居ず陽は眞上  
揺り起せば今日は第三日曜日  
はかなくも石に刻みし特務の名  
眠られぬ暑さ螢の灯も淡し  
乗せられ易し腹立て易し我れ  
ひみ月の給料で服作れない  
犯人ご寫す刑事は得意そう  
平凡な夫を持つて睦しく  
召集で行く子があるにまたはらみ  
瘦薬なか／＼利かず十九貫  
明くる朝違ふ方角から戻り  
子のこゝでまた決心がちこにぶり  
丸髻は賣約濟云ふかたち  
新家庭派手に蝸蠅退治られ  
もう春が逝く、くたくたの紫雲英東  
雨が輪の遊びに耽ける池の中  
ピーヒル、ピーヒル、ピーヒルせつか  
ちな雲雀

同 同

名はよくもあり賣れない貞女  
有難し二萬五千の骨如來  
葛井寺出世地蔵にもまゐり  
怒るこだけをボン／＼知つてゐる  
氣をかへてもう一度だけ下から出  
お前もそう思ふか三機嫌なり  
安全地帯に誰も居ず陽は眞上  
揺り起せば今日は第三日曜日  
はかなくも石に刻みし特務の名  
眠られぬ暑さ螢の灯も淡し  
乗せられ易し腹立て易し我れ  
ひみ月の給料で服作れない  
犯人ご寫す刑事は得意そう  
平凡な夫を持つて睦しく  
召集で行く子があるにまたはらみ  
瘦薬なか／＼利かず十九貫  
明くる朝違ふ方角から戻り  
子のこゝでまた決心がちこにぶり  
丸髻は賣約濟云ふかたち  
新家庭派手に蝸蠅退治られ  
もう春が逝く、くたくたの紫雲英東  
雨が輪の遊びに耽ける池の中  
ピーヒル、ピーヒル、ピーヒルせつか  
ちな雲雀

同 同

名はよくもあり賣れない貞女  
有難し二萬五千の骨如來  
葛井寺出世地蔵にもまゐり  
怒るこだけをボン／＼知つてゐる  
氣をかへてもう一度だけ下から出  
お前もそう思ふか三機嫌なり  
安全地帯に誰も居ず陽は眞上  
揺り起せば今日は第三日曜日  
はかなくも石に刻みし特務の名  
眠られぬ暑さ螢の灯も淡し  
乗せられ易し腹立て易し我れ  
ひみ月の給料で服作れない  
犯人ご寫す刑事は得意そう  
平凡な夫を持つて睦しく  
召集で行く子があるにまたはらみ  
瘦薬なか／＼利かず十九貫  
明くる朝違ふ方角から戻り  
子のこゝでまた決心がちこにぶり  
丸髻は賣約濟云ふかたち  
新家庭派手に蝸蠅退治られ  
もう春が逝く、くたくたの紫雲英東  
雨が輪の遊びに耽ける池の中  
ピーヒル、ピーヒル、ピーヒルせつか  
ちな雲雀

同 同

名はよくもあり賣れない貞女  
有難し二萬五千の骨如來  
葛井寺出世地蔵にもまゐり  
怒るこだけをボン／＼知つてゐる  
氣をかへてもう一度だけ下から出  
お前もそう思ふか三機嫌なり  
安全地帯に誰も居ず陽は眞上  
揺り起せば今日は第三日曜日  
はかなくも石に刻みし特務の名  
眠られぬ暑さ螢の灯も淡し  
乗せられ易し腹立て易し我れ  
ひみ月の給料で服作れない  
犯人ご寫す刑事は得意そう  
平凡な夫を持つて睦しく  
召集で行く子があるにまたはらみ  
瘦薬なか／＼利かず十九貫  
明くる朝違ふ方角から戻り  
子のこゝでまた決心がちこにぶり  
丸髻は賣約濟云ふかたち  
新家庭派手に蝸蠅退治られ  
もう春が逝く、くたくたの紫雲英東  
雨が輪の遊びに耽ける池の中  
ピーヒル、ピーヒル、ピーヒルせつか  
ちな雲雀

同 同

名はよくもあり賣れない貞女  
有難し二萬五千の骨如來  
葛井寺出世地蔵にもまゐり  
怒るこだけをボン／＼知つてゐる  
氣をかへてもう一度だけ下から出  
お前もそう思ふか三機嫌なり  
安全地帯に誰も居ず陽は眞上  
揺り起せば今日は第三日曜日  
はかなくも石に刻みし特務の名  
眠られぬ暑さ螢の灯も淡し  
乗せられ易し腹立て易し我れ  
ひみ月の給料で服作れない  
犯人ご寫す刑事は得意そう  
平凡な夫を持つて睦しく  
召集で行く子があるにまたはらみ  
瘦薬なか／＼利かず十九貫  
明くる朝違ふ方角から戻り  
子のこゝでまた決心がちこにぶり  
丸髻は賣約濟云ふかたち  
新家庭派手に蝸蠅退治られ  
もう春が逝く、くたくたの紫雲英東  
雨が輪の遊びに耽ける池の中  
ピーヒル、ピーヒル、ピーヒルせつか  
ちな雲雀

### 座席の三人

酒井斗風

お知らせするところがあ  
ましたら、とお醫者さんが伴の  
耳にさゝやいた。  
急に郵便局がいそがわしくな  
つて役場へ碁を打ちに行つて居  
た局長さんが呼び戻された。  
毎日無理に喰はされるお粥に  
お爺さんの腹はべこ／＼だつ  
た。今日ちゆう今日はもう我慢  
が出来ん。がさ／＼と茶漬を五  
六杯喰つてこましたらと起き上ら  
うとすると、何時の間にやら集  
つて来て居た近所の人と、嫁や  
孫奴がぐるりと周囲を取り巻  
いた。  
腹がへりきつて、息をするの  
もしんどなつたお爺さんが、う  
つらくとして居ると、急に耳  
元が騒々しくなつたので、ひよ  
いと目を開けて見るとこれは驚  
いた。遠近に散らばつて居る伴

二六〇、六、一

### 御臨終

小畑自由朗



お知らせするところがあ  
ましたら、とお醫者さんが伴の  
耳にさゝやいた。  
急に郵便局がいそがわしくな  
つて役場へ碁を打ちに行つて居  
た局長さんが呼び戻された。  
毎日無理に喰はされるお粥に  
お爺さんの腹はべこ／＼だつ  
た。今日ちゆう今日はもう我慢  
が出来ん。がさ／＼と茶漬を五  
六杯喰つてこましたらと起き上ら  
うとすると、何時の間にやら集  
つて来て居た近所の人と、嫁や  
孫奴がぐるりと周囲を取り巻  
いた。  
腹がへりきつて、息をするの  
もしんどなつたお爺さんが、う  
つらくとして居ると、急に耳  
元が騒々しくなつたので、ひよ  
いと目を開けて見るとこれは驚  
いた。遠近に散らばつて居る伴





保険屋に生活の底を覗かれる  
下積へあからさまなる関の揉め  
懐手も、逆らはぬ肚で居る  
軒に旗裏は汲取口ならび  
成上りたまに隣りの門を掃き  
シシとして怖いみたいご女辭す  
慕くより抜けて乞食を親める

入試風景雜(二句)

大阪府 高石町 米本貴志子

一三二が缺けて合格表張られ  
帽章がちがうて仲よし同志逢ひ  
米丈は舶來ですご笑ひ合ひ  
奥様が地聲になつて見を吐り  
蠅叩きそれは無様な役である  
話ましまりぬ二人煙草に火を點す  
雪袋をがく女の足の動きたる  
無斷宿泊妻、妻たらぬ日

長女女學校卒業に際して

大阪府 岡田坡璃

味噌汁を御はんのたける女たれ  
子が病めば櫻も知らずほたん咲く  
質置いた金ごは知らず女給さん  
貞操を賣つて電髪美しい  
多忙ごは目薬市電の中でさし  
アル中でなくても一萬圓の夢  
昇給の晩當直でるて淋し  
ステーションを聞けばバックをさるる

大阪府 米澤曉明

教へ子に荒鷲がある時局談  
運命の暗示に似たり花鏡  
自轉車のタイヤに似たる我が生活  
人間の知慧電撃を化して記事  
宿題の子の眼に一つ赤トンボ  
妹の小さな聲が軍歌なり  
帆が一つ大阪灣を廣くする  
夕顔へ二十歳を過ぎた姉妹  
價上りを見超して庫へ錠をかけ

大阪府 尾崎黄紅

再婚はせぬ云ふ妻信じじこ  
後はい、様に書いきまます記者  
奇蹟を當ての注射ごは知るまいな  
生きてゆく人を憎みて憎まれて

大阪府 尾崎黄紅

前線の兵を想ひて

咳こんで笑ふ女給が淋しいな  
喧嘩した相手が征つた噂きく  
ゆびきりをして訣れたり春の戀

山口縣 三原狂路

米を磨ぐ水さつきまで敵が飲み  
殊動甲その日の母は泣いて居す  
風の鳴る音を聞いて、詩も出來す  
世は戦時再生ばやりスフばかり  
電髪は職人さんを安く見る  
看護婦におしへてもらふ流行歌  
幕あひを蜜豆にする話が出  
逢へなかつたのか姉の横顔  
ピアノふきたたいて女中うろたへる  
儲ける氣そう薬草は見付からず  
遠足の子に薬草の多いご  
キャンプ今狐が出たを騒ぎ合ひ  
亡き姉の面影さるる台所  
灯をさけて歩く間はあまえて見  
摘草の一人飛行機見てるたり  
手傳うて勿體らしく汗を拭き  
泣聲の響きも春だなき思ふ  
通じない言葉は木影遠ざかり  
百燭の下で決算まだ合はず  
美しいばかり愛嬌の無い娘  
遍路するよりもスタングうれしがり  
鼻少し低き姉さん嫁き後れ  
上かん屋親爺も酔うてやまを入れ  
借金をしてまで地位を得る氣なり  
一圓の昇給に新所得 税  
借金が多すぎ破産まぬがれる  
貧弱な體お金を持てあまし  
ゆべ抱いて遊んだ子の死ぬ奇蹟  
遅かつた父へ人形の有るばかり  
アルバムに亡き兒の顔の多過ぎて  
忌憚なき名論吐いて首になり  
齒ブラシを咬えて茄子もぎりけり  
闇でない獎勵金だご政府逃げ  
耻かしいけれご生れた家に居る

兵庫縣 森本花子  
河合明子  
長谷川猿吉  
澤田賢次  
野島神樂  
八田鐘生  
居谷一柳  
小坂光川

# 柳界展望

全國川柳界の各地川柳人の一擧手一投足を此展望欄ですむる様にして、たい皆様の御通信を歓迎する。(係)



川柳家庭サビース吟行(初夏の良)

がちたんさ那且の人柳川・賓主がんやち嬬やんやち坊やんさ良  
行吟情人いしら珍はれこり振スビースのクダクダ汗で事幹  
(人七十族家の君葉屋・花浦・香祭・宗水)

▼川柳雜誌社例會(六月一日午後六時)▼松坂俱樂部麻生路郎川柳講座(二日、十六日午後一時)▼有恒川柳會(十三日、廿七日午後六時)▼尼崎住友金屬工業親友會川柳會(十二日)▼川柳雜誌社月評會(十一日夜)▼廣島支部路郎歡迎會(六日夜)▼川柳雜誌社月評會(十一日夜)▼大阪川柳會(二十五日午後四時)▼純足會二十周年記念會(二日夜)▼廣島支部柳石歡迎、俱樂部新築記念會(五月二十四日)

▼石井白面人君(不朽洞會員)は商用で六月十四日から一週間の豫定で渡鮮された。  
▼橋本緑雨君(不朽洞會員)は四ツ橋支部幹事の中内翠芳君(不朽洞會員)等と六月八日大峯山へ參詣  
▼大森風來子君(廣島)は濱田久米雄君を後だてとして廣島支部の擴張に盡瘁してゐられる。  
▼菊澤小松園君(不朽洞會員)は南紀湯崎よりカン／＼照りの梅雨空の下完全に伸び切つてゐるとの便りがあつた。  
▼村松夢裡君(不朽洞會員)は同業者の會員一行と潮の岬の燈台を見學串本節の本場をすぎ勝浦港絶勝の地、紀伊南端のうらしま旅舎より「絶景は異口同音の聲となり」の句をよこされた。  
▼姫田夕鐘君(不朽洞會員)は六月一日靈峯西山上高越山へハイキングに出掛けた。藤の花が満開でわらびが二貫目取つたとはいふやましいはなし。  
▼中島生々庵君(不朽洞會員)の富士山麓兒童養護道場はいよいよ開場になるので六月十五日夜から大阪を立たれた。兒童達は十六日午後五時頃山へ到着の豫定である。  
▼戸倉普天君(不朽洞會員)より五月二十三日附の繪葉書到着「富山縣に參り序を以て日電庄川ダム見物、汽船にて通る事三十分、大牧温泉に一浴致し候、平家の殘黨の系圖を語る平村の





武洞に 白面人・路郎・天普・生々庵・之助 白面人・路郎・天普・生々庵・之助

### 川柳 但馬路へ

但馬の出石に笠森さんがある  
そんな。昨秋北嶺に笠森社を尋  
ねた我々は又いつてみたくなつ  
た。

五月の第三日曜(十九日)午前  
七時四十分大阪驛東口に集る。

もう二人揃はず驛の時計見  
る 普天

定刻へあまりきつちりでも  
困り 白面人

その二人生々庵と孤篷が先着の  
路郎先生、普天、白面人、美根  
子、美根子令息と落合つて一行  
七氏。大社行急行乗車。

動くまで誘はずにゐる食堂  
車 白面人

一人一人ではいつかど紳士達な  
のに

青切符ちと喧ましい顔揃ひ  
生々庵

都育ちアレ小麦かと汽車の  
窓 普天

車窓から眺めて米の話など  
白面人



談笑一刻福知山着。兼ねて停車  
時間にお逢ひする約束の柳友小  
細自由郎氏が捜すより早くに乗  
込んで居られて

後からお辭儀だけした氣の  
弱さ 白面人

出石の笠森稻荷 出石町役所の大友氏(右)と路郎主幹(左)と自由郎君

名物と名所をきいて一つ買  
ひ 孤篷

後からお辭儀だけした氣の  
弱さ 白面人

### 武洞に

あの句この句句主と句主と  
がよく笑ひ 同  
提げてこられた赤垣源藏張りの  
四つの大徳利は野趣あり豊醇な  
中味と、もに純丹波産。和田山  
まで同車される管が話す程に飲  
む程に強大な引力となつて自宅  
へ電報を打たしてしまふ。この  
自由郎氏なんと先生の御顔を見  
るのが今日始めてとか。云ふま  
でもなく私たちも初対面。

徳利に仁義をいはず初対面  
孤篷

不自由な時代を自由郎氏の出現  
で酒肴にありつき一段の彩光を  
はなちつゝ十一時すぎ豊岡へ下  
車。普天氏の肝入りで車萬端用  
意が出来てゐる。

温厚の徳にみんなが背負は  
れて 自由郎

目ざす出石町までは二十分程の  
ドライブ。屋根の薄い山陰らし  
い城下町に入り町役場で紹介状  
を出す。案内の用意が出来る間  
名物竹輪などひやかす。

名物と名所をきいて一つ買  
ひ 孤篷

後からお辭儀だけした氣の  
弱さ 白面人

早速笠森社へ向ふ本通りから小  
徑を敷歩入ると朱の鳥居が見え  
る。

石段へ連れて来たは見降ろ  
され 白面人

聖戦以來氏子の中に神靈の加護  
いやちこく武運長久の祈に賽す  
るものが多いとか。神前の幟に  
も戦時色がある。社歴によると  
村上天皇の御代に創建。保食の  
神をまつる。どうも話の様子が  
北嶺の笠森さんとあまり關係が  
なさそう。兎に角當節のあた  
り神様らしく

神主が奉加帳出す如才なき  
普天

と云ふわけで研究は後日にゆず  
り下向して、この町にある澤庵  
和尚の住持宗鏡寺に赴き晝食。  
食後、柳生流の倒れ襖なんてシ  
ヤレの傑作が美根子さんの口か  
ら出た御座敷拜見。城崎の向ふ  
香住にある應舉寺へ行こうと云  
ひ出す。こゝの襖畫なんか誰が  
見向きをするものか。

落款を見てからほめる襖の  
繪 孤篷

窓々鶴の本城をのぞきに鶴山へ  
向ふ。木の頂上  
に築こもりする  
のは丹頂鶴でな  
くてドイツの子  
供達の子供をつ  
れて来る鳥と信  
じてゐる鴻の鳥  
だとか、冬の二  
三ヶ月以外はこ  
ゝに来て村人と  
親しんでみると  
か。雙眼鏡でみ  
ると成程松上の  
白い存在は生き  
生きと躍動して  
ゐる。

窓々鶴の本城をのぞきに鶴山へ  
向ふ。木の頂上  
に築こもりする  
のは丹頂鶴でな  
くてドイツの子  
供達の子供をつ  
れて来る鳥と信  
じてゐる鴻の鳥  
だとか、冬の二  
三ヶ月以外はこ  
ゝに来て村人と  
親しんでみると  
か。雙眼鏡でみ  
ると成程松上の  
白い存在は生き  
生きと躍動して  
ゐる。

窓々鶴の本城をのぞきに鶴山へ  
向ふ。木の頂上  
に築こもりする  
のは丹頂鶴でな  
くてドイツの子  
供達の子供をつ  
れて来る鳥と信  
じてゐる鴻の鳥  
だとか、冬の二  
三ヶ月以外はこ  
ゝに来て村人と  
親しんでみると  
か。雙眼鏡でみ  
ると成程松上の  
白い存在は生き  
生きと躍動して  
ゐる。

# ルービヒザア

大日本酒株式會社

動物園にもたしかに鶴がお  
つた筈 自由期  
出石では鶴を我子の様に云  
ひ 普天  
五位鷹が飛んでも騒ぐ鶴の  
山 白面人  
鶴らしいものを見つけた鶴  
の山 孤篷

川岸に出る。  
水鏡初老の顔でメダカ追ひ  
生々庵  
聲かけてみたが投網はかな  
つんば 孤篷  
香住の應舉寺は時間に無理が  
あるので割愛して日和山に直行  
自然水族館など覗く。

此向ふッ聯と案内層を上げ  
自由期  
浦塩が見えると洒落れる日  
和山 白面人  
ワサビなんぞ忘れて鯛の群  
をほめ 自由期  
都會人干したわかめにふれ  
てみる 孤篷

一走りして城崎西村屋旅館に入  
る。  
嵌口令とけてカメラだフイ  
ルムだ 生々庵  
日本語だけぢやインテリ不  
便がり 白面人  
清遊へ藝者の紅い紅い襦  
着 自由期

清遊が三度の米にそれてゆ  
き 同  
温泉で逢へばどちらもつれ  
てゐる 路郎  
町へ出る。人形おとしなど。  
人形へ四十路近きを忘れ果  
て 自由期  
皆と別れ夜汽車で歸る醫者  
稼業 生々庵  
二時で歸られる生々庵氏と美根  
子氏令息を送つて寝る。

それからが又一問題屋屋落の  
句一流れ。

孤篷臥すの報へあわてたカ  
ルモチン 自由期  
二十三貫二百の寝息だあき  
らめる 同  
捨てられた孤篷を先生がひ  
ろて寝る 同

翌朝は多様な方ばかりとて豫定  
通り七時二十分の列車で大阪へ  
福知山で自由郎と別れて乗換へ  
ると。先客に宇垣一成さんがゐ

る。とたんに雄辯が沈黙する。

平民は閣下などとはいはず  
すみ 孤 籬

四人の様に大官護送され  
同

大官も途中で降り又朗らかさを

# 宮島の半日

## 嚴島幻想

案内人のそつぽを向いたもの  
云ふぶり。

うす曇りの午後の、歩くたび  
に音のしそな廻廊を、千何百  
年とか何百何十年とか、思はず  
加へ算をしそなる年数のこ  
けおどしを心のなかで笑ひなが  
ら、しかるべき處では頭をさげ  
などしてゐた時はまだ僕は嚴島  
に居なかつたと云つていゝ。

石氏が、案内人と、案内人のひ  
きつれた十名あまりをやりすご  
して、本殿の横手へまはり、指  
して、社殿の屋根のあたりへわ  
れわれの注意をむけた瞬間から  
忽然として嚴島が、他の人は知  
らず僕目の前に立ち現はれた  
のであつた。

取もとして○時過大阪着。

お土産に都會にはないもの  
を提げ 白面人

解散。此行に紹介状を賜はつた  
米本氏に紙上深謝。(孤籬記)

的な人びとの、いろんな偶然の  
累積が一つの必然にまで進み得  
るといふ風な思ひちがひの材料  
になることよりも、もつと、幻  
想の園としての方が値打ちもあ  
り、意味もあるのではなからう  
か。文獻の、隙間もない集列に  
よつて明らかにされる近世より  
も、あいまいに、今はすでに淺  
はかな人智の證據立てのあちら  
に退いてしまつた中世の方が、  
歴史としては興味があり、眞に  
後世の人たちに力をほ及してゆ  
くのは、そうした空想なり、夢  
幻なりではなからうか。

氏の解釋による平安文化を表  
象する曲線と、次に勃興せんと  
する鎌倉時代を暗示する鋭い三  
角形の形造るその様式の面白さ  
よりも、休日毎に此處に来て、  
ある時は、人氣のない暗がりの  
數刻を過すことさへあるらしい  
柳石氏の、その感じの方がもつ  
つと僕を興がらせ、あの三角を  
上昇した僕の感興は、その上の  
曲線にやわらげられて、謡曲以  
前の時代に立ちもどつてしまつ  
たとしても、旅の想に身をゆだ  
ねてゐる僕にとつては、あなが  
ち無理ではなかつたのである。  
歴史とは、よつてもよつて何か  
の理屈を引き出さうといふ實證

の太刀。千々にみだれる想ひを  
人目から、またはあまりにもあ  
からさまな外の光から防いだ  
あらう楯盾。又は、あれが血の  
痕であるか説明される古い甲冑  
時の幼いみかどの御物であつた  
といふそしてかゝるものをつけ  
られたいたけな身の波間に、  
失せさせ給ふたことの無残さ  
に、胸のつぶれるほど小さな  
御衣。——これらのものもろに  
とり巻かれ潮のやうに湧き起つ  
て来るまぼろしに身を  
揺られながらゐたわづ  
かの時間こそはまこと  
にこの世にあらぬひと  
ときではあつた。そし  
てそれが何百年の前で  
あらうとなからうと、  
感ぜらるゝかぎり現實  
のひと嗣として僕の身  
近かにあつたことは云  
ふまでもないことであ  
らう。

靴を履けば、それは  
すでに廿世紀、鹿のよ  
つて来るのは大和の古  
都と變りなく、むしろ  
味氣ない風景である。  
ホテル、某旅館など、  
そのもつ挿話は別とし  
て、嚴島ならずとも  
風景であらうか。

島を訪ふてすでに一週間の今  
現はれるのは以上の想ひのみで  
ある。他に附加へるべき何も  
もない。同行の人びとのあひだ  
の交歓は、これはおのづから別  
個の文章のなかで語られねばな  
らぬ一つの環であらう。

間を縫つて行くのだから面白  
い。その中で柳石氏、この島は  
繩張りであつて案内人そのこのけ  
の説明振り。微に入り細を穿つ  
ての御案内にこれも地元の住人  
である久米雄雄れ入つて感心す  
ることばかりだ。

記念撮影は鹿を配して。先刻  
からそれと知つて集つてゐるの  
に、市多樓氏鹿寄せに芋を抱え  
て又ぞろ／＼引張つて来た。お  
蔭で前は鹿だらけだ。寫眞屋さ  
んに追つて貰つてやつと撮つて

## 好々來

○私は疲れた。だが、こんな  
疲れ方は幾ら重つてもよい。有  
難い、思出深い疲れ方だ。一日  
が、三日も四日も其の中にこも  
つたやうに長かつた。面白かつ  
た。路郎師某人氏を廣島驛  
頭に御見送りして(八日午前零  
時半頃)の歸途、電車道を、松  
岡さんとテクリながら、斯う思  
つた私は。

○初対面は、岡田某人氏、多  
田市多樓さん。某人氏は「旅の

廣うといふ始末。皆さん。嚴島  
で寫眞を撮つて貰ふときは半は  
必要ないですぞ。  
柳石氏の御親戚でほろ酔つた  
一行を乗せて連絡船は島を離れ  
た。先生も某人氏も盛んに句作  
の體。  
僕は灯の入つた島の美しい景  
色に見とれながら、昨日から今  
日にかけて聞いたこと見たこと  
嬉しかつたことを整理しなけれ  
ば不可ないと考へてゐた。  
(濱田久米雄)



嚴島に 君諸の樓多市・人某・石柳(右列後) 雄米久・郎路(右列前)

入つた折、ふと傍を見ると、作  
句の鉛筆を執上げてゐる路郎師  
だつた。

さよなら さよなら宮島灯  
路郎  
○某人氏は、その折、メモの  
一頁を千切ると私の手中に握ら  
しめた。見ると  
ありがたし有縁の猪口のま  
ん丸し  
そして又、やゝあつて、しが重  
りますねと、まん丸くさ書改め  
た某人氏であつた。  
○市多樓さんは宮島から直ぐ  
と、下關へと急ぎ引かして行  
かれた。和服姿の市多樓さん  
○で、濱田久米雄幹事が、私  
の肩を叩きながら今日はようけ  
聴かされたが、整理せにやなら  
んのう、と目をしばたいて云  
つたけ。

○廣島の甲斐には松岡さんが  
一行の歸りを首を長くして待つ  
ていられた。そして甲斐から戀  
の巻の灯の裡へと一日は延長し  
て行つた。(石崎柳石)

## 鹿に惚れられて

思出多い六月七日、其の追憶  
を呼び起して見たが、あまりに  
もその見聞きした事が多過ぎる  
考へれば考へる程頭が多過ぎる  
雑で、其の整理も困難の様だ。  
久米雄氏から面白いことを書け  
たことであるが廣島の半日も  
宮島の半日も實に面白い事は  
事は何人と言つても有難迷惑で  
あつた。寫眞を撮るので、路郎  
師はじめ、五人が寫眞師の要求  
通り整列をした。處が後の方か  
ら小生の袖を引く者がある。ハ  
ア！と、思ひながら、振  
り返つて見ると、一頭の鹿君が  
小生の袖を引いて居るではない  
か。それも口で啞してゐる。  
南無さん一丁羅の細羽織、寫眞  
どころのさわざじやない。鹿を  
追ひ除けるのが一所懸命である  
その時路郎先生、曰く、鹿は牝  
でないか、と、一同思はず噴き  
出した。私は列車の都合で四人  
を残し、一足先きに連絡船に乗  
つて引きかへした。  
限りない慾を残して先に立  
ち (多田市多樓)



# 川協のジ

(迎 歡 信 通)

▼川柳研究社では六月十六日比谷公園内松本樓に於て刊行十年記念句會を開催された。

▼三越天守閣は六月三日午後一時創立五周年記念句會を中之島中央公會堂階上に於て開催された。三越の休日である月曜の會のことではあり、殊に晝の會であるから出席を多少氣づかつてゐたが、なかなかの盛會だつた。夜は阪神打出の三越俱樂部で東京三越の尾山鬼耳、村澤小萩兩君の歓迎會が開かれた。

▼阪井久良俊翁は去る二月二十日大腸疾患のため入院、一時危うられし。

▼寺井銳々君は有恒俱樂部の機關誌「有恒」に「佳い句と好きな句」の稿を續載して俱樂部員に川柳を普及させる一助とされてゐる。

▼國都川柳集團は六月十日夜句會を開かれた。

▼大井正夫君(新京)は五月二十二日滿洲第一の娘々廟會大石橋の祭を見に行かれ大石橋驛スタンプ捺印の葉書をよせられた。

▼北みきを君(大阪府)は第一線から「川維」へ「陣中漫畫」を寄稿されてゐたが、六月三日川柳雜誌社を來訪、麻生主幹と歸還後最初の快談をされた。

▼朝野久人君(大阪)は六月二日義弟が永眠されたので石川縣へ赴かれたとのこと。

▼竹重隣虛心君(阪急會根實業専修女學校校長)腎臓病のため靜養中のところ尿毒症を併發し

會を開かれた。

▼大井正夫君(新京)は五月二十二日滿洲第一の娘々廟會大石橋の祭を見に行かれ大石橋驛スタンプ捺印の葉書をよせられた。

▼北みきを君(大阪府)は第一線から「川維」へ「陣中漫畫」を寄稿されてゐたが、六月三日川柳雜誌社を來訪、麻生主幹と歸還後最初の快談をされた。

▼朝野久人君(大阪)は六月二日義弟が永眠されたので石川縣へ赴かれたとのこと。

▼竹重隣虛心君(阪急會根實業専修女學校校長)腎臓病のため靜養中のところ尿毒症を併發し



# 一路集

## 家相 綠雨選

家相など信じられない親不孝  
家相などいつか氣にする年となり  
郊外へ家相に合ふた家を建て  
家相からなるほどと云ふ主家なり  
家相など知らず社宅に住み馴れて  
迷信と笑ふ家相へ病み續け  
家相など言うては住むに家が無く  
長男に死なれ家相を見て貰ひ  
南向き家相ヤツバリ理に叶ひ  
家相の事言はず鐵筋コンクリート  
家相とは別に新建氣持よし

九 坡  
孤 舟  
照 波  
彌 生  
洋 琴  
水 虹  
巨 人  
文 庫  
凶 人  
久 人

▼講習會員募集！  
いつからでも入會出來ます

◆輕音樂科◆  
・マンドリン・ギター  
・アコーディオン・歌謡曲  
・タンゴバンド・タツブ  
・コミックコララス・チャップ

◆専門本科◆  
・ピアノ・ヴァイオリン  
・管樂器  
・作曲・樂典

◆鑑賞科◆  
月曜・木曜月謝金五十圓  
午後六時より校友會費五十圓  
毎週水曜日 午後六時より  
校友會費 金五十圓

大阪市西成區玉出本通三丁目  
**市民藝術學院**

六月九日午前零時阪急會根の寄宿舎内で逝去された。

▼馬場孤蝶君 明治文壇の宿痾 孤蝶馬場勝彌氏は今春來の肝臓癌に最近腹膜炎を併發、東京澁谷區松濤五の自邸で療養中であつたが二十二日午後三時十分死去された、享年七十二。

▼最近昭和川柳社の同人を退いた八尾綠破、中井六花、岸本誦二の三君によつて小型柳誌「赤煉瓦」六月號が創刊された。

▼小型柳誌「川柳香車」が東京市神田區東神田十四(壽徳堂内)川柳香車發行所から創刊された。(非賣品)

▼藤里好古君(大阪)は「神佛分離時代と大阪の神社」を大阪市北區河内町二丁目一番地星繁文庫から出版された。非賣品

▼沖野岩三郎君(東京)は隨筆「宛名印記」を大阪府豊中市櫻塚一二四七美術と趣味社から出版された。頒價三圓(五百部限定版)なほ六月十二日夜出版記念會が宇治電ビルで開催された。

**水虫新治**  
**セロソ**  
療劑

一町野平區東市阪大  
**部藥新松井白** 元賣發  
番四八六六六阪大替振

家相かへ燕も来れば孫も出來  
家相から夫婦移轉の家捜し  
家の向どうのこうのと郷の父  
病人が出來て家相のせいになれ  
大阪のまん中で家相笑はれる  
長病ひふつと家相に觸れるなり  
借家難家相なんか云ふとれず  
焼あとに立つて家相を論じ合ひ  
破産する家と思へぬ家相なり  
(佳)窮屈をしのんで家相にうづまき  
(佳)一通り家相を聞いて庭へ下り  
(佳)女房を叱つて家相氣にとめず  
(佳)アパートに住む家相と遠くき  
(佳)氣まぐれに聞かぬ家相が氣も  
(佳)家相など何うも良いと若夫婦

神樂 夢女  
翠 芳  
久 枝  
靜 波  
みづほ  
同  
南濃路  
同  
白 鷗  
風來子  
靜 波  
久 枝  
抱 逸  
翠 芳

里の母來た日神棚清められ  
神棚も明るく朝の陽に向ひ  
神棚へ旅の土産を一つ供げ  
小料理屋神棚たげが目立つてゐ  
神棚も舊家としての煤けやう  
神棚の辭令二三日拜まれる  
神棚は躰繰りの金知つて居り  
手も盡きてもう神棚へ頼むだけ  
神棚に初穂供へて幸祈る  
神棚の鼠朔日だかと思ひ  
神棚の下で外米焦したり  
神棚へ母は無心の姿なり  
神棚へ今朝は夫の手を借りる  
神棚を拜む女の肥りやう  
神棚が明るく今宵征く子あり  
變人と言はれ神棚綺麗なり  
神棚へ半紙の端が一寸見え  
神棚と並ぶラチオのやかましき  
神棚と知らぬか鼠無禮者

風來子  
照 波  
彌 生  
九 坡  
みづほ  
抱 逸  
賢 次  
青 笠  
翠 芳  
久 人  
神 樂  
靜 波  
水 虹  
久 枝  
風 葉  
南 濃路  
同  
文 庫

年寄りが居る神棚は整へり  
神棚の隅に獻金する小錢  
神棚へ祝詞は立つたままで済み  
證明が忘れられてる母の留守  
山の幸海の幸神棚狭ますぎる  
神棚を拜むともなく座り込み  
新世帯父は神棚吊つて去に  
「世帯先づ神棚の位置を定め」と言つた句が  
十句近くあつたがそれと同想でありながら  
この句の持つ含蓄に惹つけられて佳句に頂  
いた。たゞ單に神棚の場所を定めただけで  
なく苦勞人の父がちやんとすべてをやつて  
くれた嬉しさが表現されてゐる點洗練され  
た句だと思つた。

船に神棚あり日本は神の國 巨人  
神國に生れた倅に吾々はたゞ感激あるの  
み、世界の隅々まで日章旗をひらめかす船  
は言ふに及ばず、軍艦旗の翻るところには  
必ず、皇大神宮をお祀りした神棚がある、  
たゞ日本は強いのではないと言ふ事をし  
み、味はされた句で壓巻として頂いた。

い の ち ・ あ る 句 を 創 れ

# 各地柳壇

理整秋豆・郎路

規清稿投  
用紙は原稿用紙又は投句箋の事  
文字を正確明瞭に記載のこと  
開催月日及場所記入のこと  
締切は毎月廿五日とす  
投稿先は本社宛

## 本社六月例会 (大阪)

於 御津八幡宮

六月一日

出席者(順不同)  
路郎・葎乃・きみゑ・紅多呂・リリ・紫  
香・南風・水虹・久枝・水客・潮花・翠  
芳・八歩・春巢・彩泡・かほる・孤篷  
鼓愁・鮎美・指洋・緑雨・細泉・小松園  
豆秋・安静・美知夫・満潮

互 選

ベンチャラの心算が腹を立てらる  
ベンチャラに中々のらぬけちんち  
ベンチャラの顔へまともに蜂が来る  
ベンチャラもそこまでゆけ板  
ベンチャラの次の皮肉を聞き落し  
ベンチャラをまともに聞かす酒  
ベンチャラの云へぬ性質なり断  
ベンチャラが来て内風呂の戸を開  
下積みは覚悟ベンチャラなぞし  
席題「梅 干」  
梅干でよろしくかゆを許される  
梅干へ砂糖飢饉の事も云ひ  
贅澤の果は梅干すきになり  
梅干の講習もする婦人會  
梅干の家庭で漬けた色になり  
失業の今朝梅干で出る落目  
梅干を許して醫者は立ち上り  
梅干は昨日のまんま皿にあり  
梅干へ今日は黙つて箸をつけ

(佳)母の温くみの梅干となる  
(軸)梅干の色も落目の色になり  
席題「廊 下」  
チョイナノで拭いてゐる廊下  
上草履廊下さからふ様な音  
病院の廊下雀が来てあそび  
御目見得の足に冷たい長廊下  
長廊下子供は走つてばかり  
素足ふと廊下のはしを意識する  
死んだ氣で嫁く先様の長廊下  
海鳴りを廊下に立つて聞く領事  
不平云ふ廊下に影も曲つてゐ  
(佳)口實を廊下の長さに見付け  
(軸)眞白な廊下で針を拾ひ上げ  
席題「道 草」  
道草へ延長戦となるラデオ  
道草の靴散髪屋へあづけ  
道草も無駄でなかつた立志傳  
道草をする氣の朝出るルーシェー  
道草を叱つて母は膳を出し  
大道の香具師道草の金を取り  
道草の目に美しい紅椿  
(佳)道草が砂糖一斤買うて来る  
(軸)道草へ下駄のはなをが  
兼題「種 痘」  
夏が来て種痘のあとをおかしく見  
折靴さげて種痘の順を待ち  
新妻の種痘の跡を見た今宵

種痘の痕なぞ見せて酔うてゐる  
孫連れて種痘の順に居る  
うえほうそラチオ體操はさびと居  
洋装が種痘の跡を笑ひ合ひ  
(秀)先生の種痘へ生徒園みに來  
(軸)植ほうそして針さしを置直し  
川 廣島支部句會 (廣島)  
五月二十四日 大森風來子報  
素振りにも見せぬ同志の深馴染  
病院の椅子へ不幸な顔馴染  
言ひすぎた言葉へ馴染眼を落し  
水臭いのは酒として顔馴染  
新築へ大口の寄附申し来る  
新築の祝ひ眞白い灯が點り  
新築へ素足のまゝで鯛が来る  
新築にピアノの欲しい娘ゐる  
新築へつばめ大きく来て廻り  
新築へ女中の聲が浮いてゐる  
片腕がしびれて春の窓にゐる  
片腕も兩腕も借すいい返事  
カーテンを閉めるに惜しい月夜  
枕邊のカーテン高く陽は昇り  
カーテンへ靜かにしのび寄る暮色  
カーテンは絞つたまゝに色が褪せ  
カーテンの白さ水を割る深夜  
満員の電車素氣なく通り過ぎ  
満員の電車を誇る満員車  
満員のもう一人乗る電車  
満員車春爛漫の風を切り  
四月十二日  
横着な顔で一泊断られ  
仲直りして一泊の旅に出る  
妥協點見つけたらしく隅へ寄り  
夜櫻の戻りは重い子を抱え  
夜櫻へ立てば不幸な身に見えず  
夜櫻へやつぱり似合ふ日本髪  
夜櫻へ聞き捨てならぬ唄があり  
冗談へ聞き捨てならぬ謎があり  
五月十日白外郎君結婚祝賀  
日の丸の中で肉身伸び上り  
日の丸が出て漫才は終るなり  
結ばれる二人へ幸な今日  
満潮 小松園 美知夫 水虹 紫香 かほる  
幽香里 月浦 秋無草 柳石 九呂平 白外郎 紫浪 露斗 市多樓 久米雄 風來子 江波 天國 清登詩 伯峯 俗菩薩 柳石 虎竹 須彌浩 心太樓 久米雄 紫浪 久米雄 紫浪 久米雄 三昧 心太樓 須彌浩 伯峯 風來子 天國 秋史 白外郎 天國

靴の紐結ぶに時計ぶらさがり  
結び目へ桐がたつてく糸切齒  
エンゲイジリング五月の風を切り  
月給が氣になつて来た婚約期  
故山縣久子さん(釋妙照信尼)  
追悼句  
咲きかけの蕾落した春の風  
ゆく春へ乙女十九の花が散る  
眼閉すれば南無在し日のまろき顔  
黒粹に君の名がある淋しい日  
合掌の誰もが惜しい人  
二千六百年あゝ最後の春なりし  
土盛へ君を慕ふか花が散り  
ありし日の笑顔想出の句へのび  
惜春や君とえにしの少なくて  
川 梅田支部句會 (大阪)  
六月九日 水谷鮎美報  
初夏の夜女給の靴下やぶれてゐ  
午前二時夜のしぐまを身に感じ  
感情にはしつた夜がさびしくて  
夜の靜か姑さんがひとりゐる  
川 今治支部句會 (今治)  
長野文庫報  
眼の下の黒子を苦勞性にされ  
死ぬ程の苦勞もあつて成功し  
おみくじに頼り苦勞を重ねて居  
目に青葉よく笑ふ娘が二人行く  
しばらくは青葉を見せる汽車の窓  
屋台店青葉を屋根にして構へ  
川 竹原支部句會 (廣島)  
五月五日 西野みづは報  
子には子の註文がある折の中  
苦學生字引操る手の疲れて居  
榮轉も左遷も知らぬ生字引  
川 下關支部句會 (下關)  
東方司半球報  
雑念へ設計の数は喰違ひ  
喰違ひしてから氣まづい友となり  
自惚れと豫算は兎角喰違ひ  
喰違ひもう辨明はせぬ心算  
喰違ひせずは今頃長者なり  
賢次

晴見合ひ側の女中に気が移り 葉風  
 小説も浮氣があつて面白い 將  
 お土産を見てカキ餅を捨て、懐れ 代志久  
 移り氣へ三味の音メが弛んでる 九呂平  
 散水を如露で済ます廣さに居 半球  
 アトリへにパンを求めめるモデル嬢 残月  
 モデルちと乳房へ哀い線があり 半球  
 モデル嬢今日一日の衣裳つけ 九呂平  
 封筒を何度も開く水枕 文福  
 立候補の封筒切らず放つたまゝ 松翁  
 封筒の重み二、三度手で計り 藤市  
 封筒で一家の不幸くどくし 市多樓

鐵道病院支部句會 (大阪)

四月十九日

北川春集報

一服を喫ふ樂しさも働く身 幽香  
 重症の部屋から煙草喫ひに出る 春巢  
 階級論ベットの殻がうづ高し 一生  
 就職へ親は確かな方を選び 嘘川  
 入院へ櫻の枝を活けて去に 紫花  
 入院へさて方角が氣に掛り 水虹  
 入院の隣りの部屋は唄が好き 市多樓  
 入院の日は人生觀など少こし 里公  
 入院の費用を病人から聞かれ 水客  
 靈柩者に會うたを入院不吉がり 春巢  
 品切れと知りつゝ廻る小半日 幸路  
 制服で母と墓參にやつて来る 久枝  
 亡き父の癖なつかしむ一周忌 骨減

四ツ橋支部句會 (大阪)

五月十六日

中内翠芳報

樞原へ團體の旗目立つなり 夢想  
 團體の疲れが目立つ宿屋の灯 綠雨  
 金魚の賣聲を聞く晝寝なり 山人  
 町角の金魚の店に人だかり 翠芳  
 巡禮の後ろから来る金魚賣り 白峯  
 金魚鉢靜かに見てる懐ろ手 同  
 テーブルの金魚を見てる女事務 綠雨  
 大阪の汽車辨賣の聲高し 綠星  
 團體の辨賣ひに幹事行き 茶屋出  
 團體の辨賣ひに幹事行き 翠香  
 辨賣が並ぶ一萬二千尺 翠芳

塗青支部句會 (大阪)

五月十二日

淺謙公報

田舎宿地酒と思へぬ味になり 枝折

生活に疲れ埃と住んでゐる 子元  
 玄關子外交官が理想なり 謙公  
 玄關へまだ言譯が纏らぬ 子元  
 玄關の威壓、額の汗を拭き 光路  
 本絹の傘は疊の上で干し 同  
 迎へ傘薄化粧した妻が見え 謙公  
 留守の子に土産はタンクと念押 久子  
 土産から縁となりたる今の妻 小童  
 故郷の錦土産の置きどころ 香林坊  
 朝出る脊へ土産を子が預け 光路

松坂俱樂部句會 (大阪)

五月十九日 石井白面人報

ものゝわかる息子になつて左り前 白面人  
 左り前惜しい容貌の娘が二人 同  
 左り前父はお人がよいばかり 同

川柳を募る

★化粧新聞社柳壇

課題

「香り」七月十日

用紙は官製ハガキ(化粧柳壇と明記の事)

選者 麻生路郎氏

宛先 堺市出島海岸通二丁一八二番地

不朽洞

左り前の噂に愛覺悟する 普天  
 兄チャンが結んでやつて左り前 同  
 左り前それとも知らず募集員 同  
 左り前婦人ドレスの身のこなし 美根子  
 左り前緑者は遠く遠く居る 自由朗  
 左り前の最後へ娘拜まれて 同  
 左り前になるぞと北濱かいてなし 孤篷  
 左り前土蔵に用の多き日よ 同  
 左り前承知で妓引かされる 同  
 左り前知らせず母を死なせたり 生々庵  
 左り前とも云ひ出し兼ねて寄附頭 同  
 左り前まだ自家用を手離さず 路郎  
 左り前いつ訪ねても、お留守です 同  
 作業服洋服筆筒の外に置き 普天  
 洋服筆筒店の金庫の鍵も入れ 同  
 洋服筆筒をありたけ出して吊り 白面人  
 寝不足を洋服筆筒も知つており 美根子

ひとりもの洋服筆筒へ歸つて來 孤篷  
 引越しに洋服筆筒もあると知れ 生々庵  
 停年に近く洋服筆筒買ひ 路郎  
 六月二日

税關吏商賣人のコツでゆき 美根子  
 官吏學第一章は威張り方 生々庵  
 22んが423が6で官吏也 同  
 官吏真いわけを官吏がいつち知り 同  
 お役所で逢へばなか／＼笑はない 白面人  
 官吏官吏の眼干からびて 方正  
 監督官閣で買ひ度い事もあり 普天  
 停年の官吏に理事の椅子が待ち 同  
 大官の通過國婦の裾模様 同  
 官吏曰くもつとベコ／＼してお 孤篷  
 要領のいゝが官吏としての難 同  
 服務規律衆の模範に瘦せ細り 同  
 逢狀に天地の紅のなまめきて 美根子  
 逢狀を鼻であしらうとも知らず 白面人  
 逢狀を出して一風呂浴びに立ち 同  
 逢ひ状を見せて妓白い呼吸 孤篷  
 藝者ですその逢狀も断はれず 同  
 さり氣ない顔で逢狀胸にさし 生々庵  
 逢狀を忘れた様に飲んでゐる 同  
 こんな妓に逢狀の來る今宵也 同  
 逢狀は見たがこの席抜けられず 同  
 逢狀は出したが心細い仲 同  
 次々に逢狀さばいてゆく老妓 同  
 逢狀で直ぐ來る程の仲でなし 普天  
 貰ひまで掛けたが相手はアルと聞く 同  
 逢狀で出て行つたのがもどつて來 同  
 社長の子百面相できげんとり 美根子  
 髪を分けた小供が母の使ひにき 方正  
 子の世界チヨツピリ掛引なども 孤篷  
 旅歸り袍を子供にあけさせる 普天  
 子供には無理算段の入學期 同  
 子供の眼まぶしい父となりけり 生々庵  
 お母あさんになつて子供へ苦笑 白面人  
 子のことで家に二派も三派も出來 同

有恒川柳會 (大阪)

四月二十四日

寺井鏡々報

駈引は顔附ほどの損でなし 波夢造  
 駈引が眞實になつて狼狽へる 同

駈引は小切手一度書いてみせ 同  
 駈引へ背いてゐる老巧さ 同  
 駈引がばれて止むなく高笑ひ 同行三  
 駈引に舌の生えてる老社長 同  
 生れつき嘘は嫌ひとかけ引し 同  
 ザツクパンに話しませと駈引し 同  
 支那歸り駈引だけを憶えてき 同  
 眞實に惚れて呉れたか駈引か 同  
 眼が覺めりや駈引もあつた戀の仲 同  
 駈引で起されてゐる果報者 同  
 二の足を踏んで駈引見破れ 同  
 駈引をしたのが女氣に入らず 同  
 お電話というて來させて席を立ち 同  
 駈引の辭表と幹部だけは知り 同  
 死にますといふ駈引の強いこと 同  
 驛前のカフェーうどの客もあり 同  
 うどん啜る坊やの顔に五六人 同  
 うどん屋の主人湯氣から返事する 同  
 やつと出て來る巡査はうどん食へる 同  
 お風呂屋の歸りにうどん二ツいひ 同  
 ざるうどんいつも喰べて野暮に入 同  
 うまさうに見える舞台のうどん 同  
 何日からうどん屋があるビルの横 同  
 門衛もついでにうどん一つとり 同

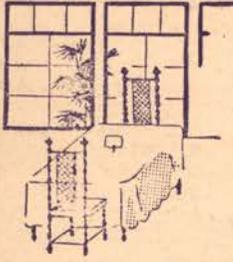
五月二十三日

外出は食堂行と決めてる子 徳二  
 新婚は一人で出ても冷かされ 同行三  
 今日も亦クラブですかとにらま 同  
 交換手外出中と告げたりきり 同  
 用のない友外出の間際に来 同  
 外出に天氣豫報の無慈悲なり 波夢造  
 外出とあつたり電話切られたり 同  
 どうしても外出したい髪の出來 同  
 外出のはずの男の電話聲 同  
 外出の札掛け放す社長室 同  
 あゝしんどまで吹込んだ白レヘル 同  
 レコードを大きく鳴らし密談し 同  
 レコードを掲げて歸つてよババ 同  
 レコードの土産それは直ぐ知れ 同  
 レコードの綴目に響める長い曲 同  
 レコードに習うた節と知らずほめ 同





品賣發田武



鎮痛  
制酸

胃酸過多症・胃痛に

ノルモザン錠

ノルモザン錠の治癒作用は、服用後先づ胃の粘膜を被覆防護し、次ぎに分解して過剰胃酸を吸着し或は分泌腺を収斂して胃液の分泌を抑制するにあり。又本剤はロートエキスの配合により胃痛を緩解す

【主治効能】 胃酸過多症、溜飲、胃痛、胃潰瘍、胃痙攣、便秘、悪酔、二日酔、飲み過ぎ等

【価格】 日分(0錠) 日分(0錠) 一週間分(一週) 一月分(一ヶ月) 二月分(二月) 三月分(三月)

町録道市阪大 店商衛兵長田武 式株 元賣發

33(2)212

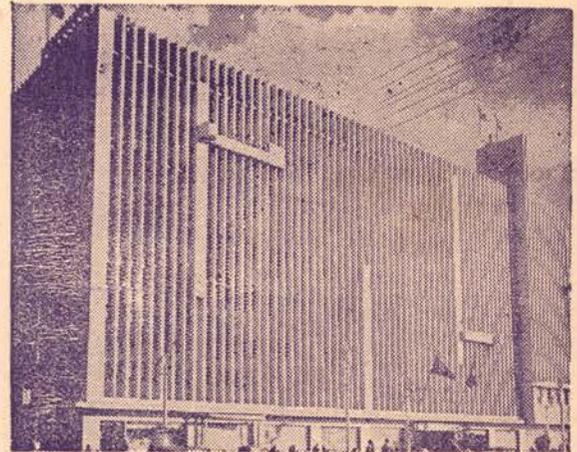


二葉屋商店

金屬代用罐  
食品用紙容器  
アイスクリーム用紙器

製造輸出

大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地  
電話 事務所用 天下茶屋四一〇四番  
工場専用 天下茶屋四九五四番  
振替口座 大阪九七〇四四番  
郵便私書函 大阪天下茶屋局一八番



物價國策に協力する

銃後百貨店「そごう」



大阪  
一心齋樓

そごう

# SENRYU ZASSHI

Published montly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

大正十三年三月三日創刊(郵便物認可)毎月一日(日發行)  
昭和十五年六月廿五日印刷(縮小) 昭和十五年七月一日發行

川柳雜誌

NO. 198

定價金30錢 送料壹錢

にきびとりに

# 美顏水



# ニキビ

蚤・蚊・南京虫等の  
毒虫でカユイ時!

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

▲ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の薬です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧、ぜひお勸したい薬です!

▲定價一匁四十銭・六十銭・一匁廿五銭。全国藥店にあり

ゼ	吹	ニ
ヒ	出	キ
此	物	ビ
薬	に	・

5-53

# 化粧用 美顏水

最	粧	の	ア
適	下	お	ブ
!	に	化	ラ
			顏